

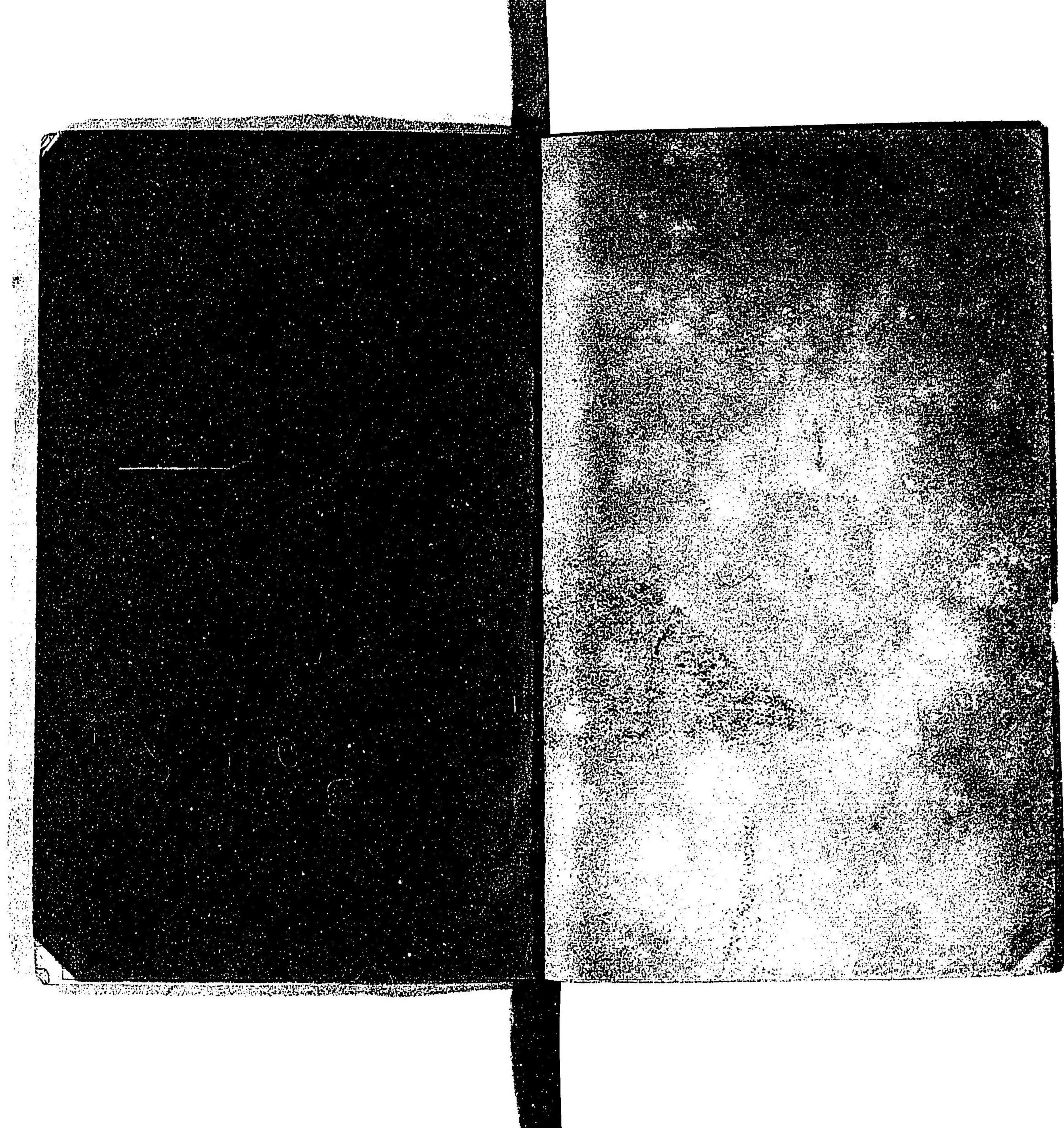
71  
334

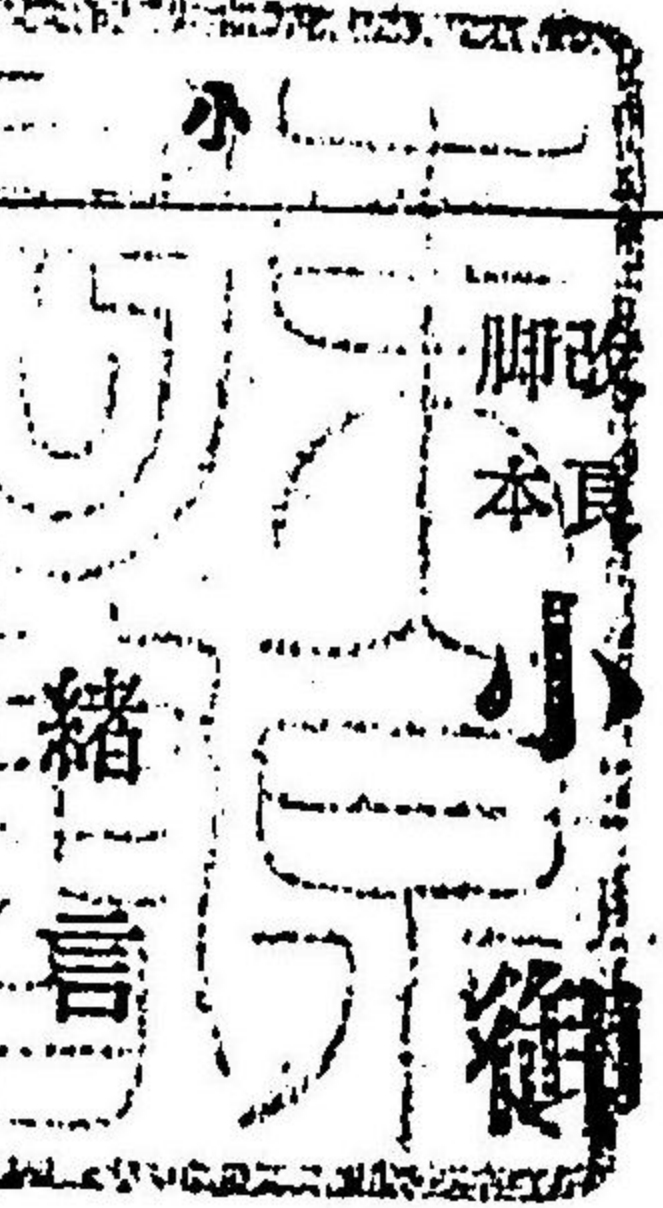
依田學海作

改良  
脚本  
小御門

袖珍小說第七編







門

學海居士



脚改本 小御  
 緒言  
 この脚本は。尋常演劇の舊套を破りて。別に一體を爲す。然れども全く據處なきに非ず。承久軍物語は。もと繪巻の解釋なるをもて。一段毎に畫解あり。今舊の場割と稱する處は。この例に倣へり。言語は大抵當時の古言を用ひて。漸く近き頃の言をも斟酌せり。その通し難を恐れてなり。一篇趣旨は。文貞公か忠義節樂を願すに在り。

正史を演義して支節を生ずる所と雖も。必ず當時の情態を失はす。公をして再生せしむるとも。必ず首肯せられんことを信す。

目録

第一齣

第一節

記録所堀重門の前

第二節

同公卿の座

第三節

同玉座

第四節

常御殿の廊

第二齣

第一節

敷山の行幸

第二節

西園寺北山の山荘

第三節

同泉殿

第四節

同寢殿

第五節

同北向の曹司

第三齣

第一節

唐崎の濱邊

第二節

同濱邊

第三節

敷山西塔の釋迦堂

人名

緇紳 西園寺大納言公宗 花山院大納言師賢 四

條中納言隆資 萬里小路中納言藤房 宰相中將

季房 左中將貞平 右中將為明 左少辨行俊

右少辨資名

武士 壹岐三郎左衛門尉武廣 矢田彦七忠資 海

東左近將監貞範

公家侍 右近將監橘信康 右兵尉藤原範常 左近

衛將曹源光繁

法師 岡本坊快實 桂林坊惡讚岐 淨林坊豪譽

女流 右兵衛局 大納言内侍 侍從

童子

海東幸若丸

藤原貞文  
公事蹟 小御門

第一齣節 記録所の堀重門の前

正面に檜をもて作りたる堀重門ありて。その扇を閉ぢ。そのかたはらに。穴門あり。左右は筋瓦の入りたる築土。そのうちに。松の立木の梢みゆ。遠く比叡山の峯巒かすみて見ゆ。かなたより。法師の衣のうちに。腹巻したるに。袈裟をもて頭を裹み。太刀を横へたるが。走來る。そのあとにつゝきて甲冑したる武士。もみ烏帽子に。手に弓

を持ち背に箆を負たると。腹巻に烏帽子したる下仕一人長刀をもちて出で來る。この兩人は手々に松明をさしかざしたり。

法師「やよ。あのく。路をいそぎつるほどに。はやこゝは。記録所の御門と覺ゆるぞ。夜更なれば。御門守はまかりつらん。いかにせばや。武士いなく。當番の衛士はぬまり申すまじ。いそぎあどない申さん。法げによさらば。」

穴門に立より。拳をあげて。どうくど打たしく。法俄に申べき事のありて。大塔の宮の御使參上候ぬる

ぞ。御門守々々。あけさせられい  
門のうちにて聲高く。

「かゝる真夜中に。何物か参りたる。寄人候人の御方はや  
まかん出られたり。訴訟の事あらは。明日はや参り候へ  
かし。今夜はせんない事ぢやまかりかへられよ。

法いや。さる事にあらず。山よりの御使なり。當直  
の殿上人に申さんずる事のあり。此よし申給へ。

これをきいて。穴門を開きて。烏帽子直垂したる武士  
出來り。法師に向ひ。

「こは。何人かと思ひしに。和僧は叡山の岡本坊快實にて

あはせしな。かゝる真夜中。いかなる急變の候や。

こなたの武士は。松明を揚てすかしみて。

「御身は。禁中警固の頭人壹岐三郎左衛門武廣ぬしならず  
や。あみわすれ候か。某は大塔宮の伺候人矢田の彦七に  
て候ぞ。

武廣はすゝみより。彦七に式代して。

「これは矢田ぬしか。めつらしや。快實律師と。うちつれ  
立てあはせしは。そもゆゑこそあらめ。はやはや仰候へ。  
法密事なれども夜更たるに。御身なればつゝまむやうな  
し。和殿も定めてもれきゝ給はむ。關東退治の御事を。

廣あな聲高し人もやきかんまばし。

あたりを見廻し人無きを見て。

さては御坊今夜あわたしくおはせしは御隠謀の事漏れ  
て關東より討手の上りしに候はずや。進いかにも。其事  
にてこそ候へ。今日工藤何某とやらんが。三千ばかりの  
兵をめて。六波羅につきしとぞ。うけ給はる。彦宮はか  
ねて六波羅の館に志のひものを入置かせ給ひしかは東使  
か持ちまゐりし文箱をいまた開かぬまに。はやくもそれ  
とまろし召し快實坊とそれかしに仰付られてこのよしは  
や奏聞してかの兵等かよせぬほどにとく御坐所を他に移

し奉れどの御事にて候そや。廣すはや一大事になりけ  
り。ちども。猶豫なりかたし。そのよし宿直の御方に申  
上候はん。送今宵宿直の公卿は。誰くにてましますぞ。  
廣花山院の大納言師賢の卿。萬里小路中納言藤房の卿。  
宰相中將季房朝臣。藏人右少辨行俊朝臣にてあられは。ま  
づ萬里小路どのに申すべし。いざ。御案内申さん。  
こなたにはやう御入あれや。兩人さらば左衛門どの。參  
らうぞ。

第一齣第二記錄所公卿の座

眞むかひに蒞上下をあるし左右のかたに遣戸あり雲細



緞の煙を志きたる上に二基の燈臺をちく衣冠したる公卿二人向ひ坐してひそやかに物語する躰なり。その一人は西園寺大納言公宗一人は日野右大辨資名。公右大辨はきつらん。主上關東の威勢を、御嫉みありて。隱岐院の御事にも。懲りさせ給はず。御隠謀の御企あり。公宗いくたひとなく。練奉れど。忠言耳に逆ひ。用ひさせ給はず。あまさへ。此頃は御氣色よろしからず。竊に武士に仰せて。公宗を失はせ給はんどの御内勅あり。とうけ給はる。斯くては、天下の大亂まぬかれがたし。公宗こゝに己を得ず。まことは急使をもて。六波羅に

告やりしゆゑ。關東より使節のぼり。即ち今宵。御所に参上す。只今使をもて告越したり。志かるに先立て大塔の宮より密使あり。主上俄に他所に行幸あるへきよし仰出さる。もし御行邊を失はしいかなる大事とならんも知れず。何と。か。てだてをもつて。君をとり奉るすべなきや。右大辨はなにも思はるゝぞ。資資名も。かねてその事は承りてこそ候へ。仰せのたまふごとく。主上他所に行幸ありてはその詮なし。資名か存する所は。大納言殿もかねて知ろしめす如く。叡山の淨林坊豪譽阿闍梨は。北條相模守が姪にて候へは。はやくかのものに密使

をつかはされ。主上をすかし奉り敷山に鳳輦をのぼせま  
 らせ。豪譽同宿のものと謀じ合せ。不意に起てとり奉  
 り。關東の武士に引渡し申さは。いとくやすく候はん。  
 公けにその謀尤もよかりなん。さりながら。畏るべき  
 は萬里小路中納言花山院大納言の兩人なり。御身も知ら  
 るゝ如く。主上の御覺めでたく且才智ありて謀略に長ぜ  
 り。つねに山法師の頼みかたきを知りてあれば。諫め止  
 め奉らんも測りがたし。この義はいかに。豈御心やすか  
 れ。君にも知ろし召すごとく。資名か妹右兵衛局と申す  
 は。日頃花山院殿淺からぬ中にて候が。かゝる事も有ん

と。かねて心得て候へは。妹に向ひ山法師のうちには。  
 頼むべきもの多くあり。ましてや大塔の宮妙法院の宮も  
 ましますにより。自然御大事あらんときは。はやく山に  
 行幸あるへしと。かの殿にそれとなく申すゝめよと申せ  
 した。妹はあさはかにもこれを信とするよし承れば。  
 かの殿におきては行幸をすゝめ奉りこそすれ止め申事は  
 あるまじくと存す。公さらんには心やすし。少しも早  
 く御前にて。豈さりとして心ゆるさせ給ふな。公よし〜  
 心得てあるぞ。

第一節 第三記録所の玉座

正面御簾を垂れ玉座高く左右すべて簾をもて掩はれ。  
 下の方に妻戸あり。公卿數人上下の座にならひてあり。  
 花山院大納言師賢卿はいまた出て來らず。西園寺大納  
 言公宗萬里小路中納言藤房は上のかたにあり。宰相中  
 將季房藏人右少辨行俊右中辨資名は下に坐す。  
 公關東の兇徒上洛し。今宵俄に當御坐所へ押しよするよ  
 し。大塔の宮より奏聞あり。よりて一まつ風箏を他所に  
 うつさるべきよし。仰せ出ださる。いつれに御幸ありて  
 よろしからんや。と勅問に候。各々所存を申され候へ。

藤房卿は席を進み。笏をとり直し詞志づかに。  
 先達て左少辨俊基をもて河内國千早の住人兵衛尉橘正  
 成に密勅を。下し給はりしことあれば。はやく當御所を  
 忍ひ出させ給ひ。河内國楠加城に行幸あるが良策とそん  
 し奉つる。右中辨「いや」藤房の卿の申さるゝところは。  
 まはり遠くして。危急の御時の用を辨じがたし。叡山は  
 北門鎮護の靈場にして。且山徒は國家安泰の祈禱を致す  
 のみならず。降魔の利劔を帶し。兇賊をきり拂ふに足る  
 もの多し。はやくかしこに御登山ありて。山徒を御頼あ  
 るこそ然るべけれ。楠なんどの田舎武士を頼ませ給ふは。

勿<sup>レ</sup>昧<sup>ナ</sup>し。辨<sup>行</sup>人<sup>右</sup>少<sup>資</sup>名<sup>は</sup>いまた山<sup>徒</sup>のたのみかたきを。知<sup>ラ</sup>てやあはする。凡<sup>そ</sup>たのみかたきは山<sup>法</sup>師<sup>に</sup>去<sup>ク</sup>も。の候<sup>は</sup>す。かの治<sup>承</sup>の昔<sup>源</sup>三<sup>位</sup>入<sup>道</sup>願<sup>政</sup>高<sup>倉</sup>宮<sup>の</sup>令<sup>旨</sup>を奉<sup>じ</sup>義<sup>兵</sup>をあけしに。兇<sup>徒</sup>はじめ御<sup>味</sup>方<sup>申</sup>よし申<sup>な</sup>から。忽<sup>ち</sup>にこれに背<sup>き</sup>奉<sup>る</sup>。又<sup>源</sup>義<sup>仲</sup>平<sup>氏</sup>を破<sup>り</sup>て。都<sup>に</sup>入<sup>り</sup>し時<sup>平</sup>氏<sup>は</sup>山<sup>門</sup>に加<sup>擔</sup>の事<sup>を</sup>のそみしか。一旦<sup>は</sup>これ<sup>を</sup>ゆるし。やかて又<sup>これ</sup>に背<sup>きた</sup>る。先<sup>蹤</sup>すでにかくの如<sup>し</sup>。まかるとまたたび頼<sup>ま</sup>せ給<sup>ふ</sup>は。いとも危<sup>し</sup>。資<sup>名</sup>朝<sup>臣</sup>の仰<sup>。行</sup>俊<sup>感</sup>心<sup>仕</sup>らす。公<sup>是</sup>右<sup>少</sup>辨<sup>。こ</sup>は何<sup>と</sup>いはるし。大<sup>塔</sup>の宮<sup>座</sup>主<sup>を</sup>御<sup>譲</sup>ありしかと。御<sup>弟</sup>君<sup>妙</sup>法

院<sup>の</sup>宮<sup>。即</sup>ち今<sup>の</sup>座<sup>主</sup>にましまさすや。山<sup>法</sup>師<sup>を</sup>疑<sup>か</sup>はるしは。これ宮<sup>を</sup>疑<sup>ひ</sup>奉<sup>る</sup>に異<sup>な</sup>らす。いともかしこし。いともかしこし。行<sup>其</sup>の義<sup>は</sup>。畏<sup>れ</sup>入りぞんじ奉<sup>つ</sup>る。公<sup>ま</sup>からば。風<sup>聲</sup>を山<sup>上</sup>に御<sup>幸</sup>し奉<sup>らん</sup>。諸<sup>卿</sup>異<sup>議</sup>これなきや。季<sup>屋</sup>此<sup>義</sup>憚<sup>ながら</sup>然<sup>る</sup>可<sup>ら</sup>ず。兄<sup>藤</sup>房<sup>が</sup>奏<sup>し</sup>奉<sup>る</sup>如<sup>く</sup>。補<sup>が</sup>千<sup>早</sup>城<sup>こそ</sup>然<sup>る</sup>へけれ。その仔<sup>細</sup>は。敵<sup>山</sup>は。要<sup>害</sup>堅<sup>固</sup>とは申<sup>せ</sup>ども。山<sup>高</sup>く峰<sup>峻</sup>しくして。守<sup>る</sup>によくして。撃<sup>出</sup>るによろしからず。もし。兇<sup>徒</sup>に江<sup>州</sup>の路<sup>を</sup>断<sup>る</sup>しときは。兵<sup>糧</sup>運<sup>送</sup>の不<sup>便</sup>ありて。六<sup>軍</sup>餓<sup>死</sup>するの外<sup>候</sup>はず。千<sup>早</sup>の城<sup>には</sup>。出<sup>城</sup>あまたにして。節

處多し。敵至らば。退きて守り。敵退かば出てうつべし。かゝる便利の候へは千早こそ然るべけれ。藤「只今弟の申し如く千早は要害よきのみならず。かの楠は拔群の名將。これに従ふ勇士猛卒あまたあり。山法師はたけしと申せども。もと長袖の身に候へは。いかで武士に及び候べき。かた／＼もつて。河内の國行幸の御事こそ願はしけれ。行後「藤房の御尤も然るべうそんず。公宗いかに思召るゝぞ。

公宗答へず。やゝありて籠中より仰出さゝる旨あり。藤房すゝみより勅説をうけ給はり。藤「勅説に候ぞ。藤山

の儀は慮にかなはず河内に御幸なるべしと仰出さる。諸卿みなひれ伏して御請申す。かゝる所に次の間より大納言臣師賢参仕と言上師賢衣冠にて出来り御座にいで再拜し。公宗の次に着坐す。

師賢「只今あれにて諸卿の議論をうけ給りしが。臣師賢が存する所にては。藤山行幸然るへしと存し奉る。

藤房氣色をかへすゝみより。

「花山院殿は時勢に明かにして然も兵器に長せり。いかなるゆゑに。まか仰せらるゝぞ。藤「不肖の師賢才器無しと申せども。この儀につきてはいさゝか見る所の候。藤「な

に仰候ぞ。師恐ながら君にも聞し召し候へ。遠き水は  
 近き濁を救はずと。大塔の宮より御迎の軍勢をさし越れ  
 たるよしなれば。敵山は路次の警護子細候はず。河内國  
 はこゝを去ること遠し。警護の武士も多からず。いかで  
 すみやかに着せらるべき。山に至らせ給ひ一たび兎徒を  
 うちなひけ。その後の進止は時機に従ひ申すべし。ひた  
 すら一まず敵山行幸の御事然るべしと存し奉る。  
 藤房これに答へんとせしが藤中より仰事ありてかしこ  
 まりてこれを承り。  
 藤一勅詔改めて仰出たさる。河内行幸の事はまばらく止

められ。敵山行幸との御決定なりこの旨心得候へ。  
 西園寺公宗。日野資名。喜びの色おもてにあらはる。  
 藤房季房行俊はいといぶかしき躰。諸卿警蹕俯伏して  
 主上入御。公宗師賢資名の三人皆退きて左右の遣戸の  
 うちに入る。藤房季房行俊の三人あとのこりて。  
 師いかに季房師賢卿は常々山法師を疑はるゝに。今日  
 に限りて。あしてかしこに御幸をすゝめ奉るは。心得が  
 たし。和殿は何と思はるゝと。季房まことに仰の如く。  
 花山院殿は思慮深き性なるに。俄に志か仰られしは仔細  
 なくてや候べき。行俊どにかく彼卿の御申の如く。敵山

行幸と仰出されて。のちまた外によき計畧も候はん。いざもろとも御前に参り。御供の用意仕るべし。鷹さらは御立候へ。いざ。

第一齣 第四常御殿の廊

正面に折めくらしたる白木造りの廻廊ありその外は遙に殿閣見ゆ廻廊の盡くる處に妻戸あり廊には處々に蔀をあろしたり。こはこれ御所のうち常御殿の夜景。上の方より尹。大納言師賢卿衣冠に卷纏して只今主上殿山行幸の供奉の人数に加はらんと。表のかたにあゆみ出る。

師殿山の僧徒等のたのみ難きは今に始りしにあらず。師賢そを知らざるにあらねども西園寺大納言日野右中辨か。言巧に行幸をすしめ奉る心の底測がたし。きのふも右兵衛佐局が我に向ひ萬一の事あらむには。山法師は頼むべきものぞと。それとなく聞えしは。資名が我を欺く計畧にあらざるか。つらく思ふに彼等は。君をかしこにのぼせ奉り。不意に起りてとり奉ると覺えたれば。その密謀のうらをかむと。只今の如く申たれば。よも疑ふものあらじ。これより君に奏聞し。竊に玉體に代り奉り。我殿山に赴き君を他所に落し奉らん。然なりく。

といそぎ向ふの方に入らんとす。このあとより一人の女臈小うち着紅の袴にて槍扇を持って出来り師賢の袖を

とらへ。  
「大納言どのまはしまたせ給へ。申事のありて。興こは右兵衛局にあはせしな。俄に敷山行幸の事ありて。供奉の列に加はりたれば。今宵はゆるく御物語申かたし。折もあらば。

とゆかんとするを。なほひきとめて。

屈つれなき人の御詞や。西園寺どの。このほどより。さまくに言より給ふのうるさまに。今は宮仕もいとよも

のうくなり侍りぬ。さるにても今宵俄の行幸は。夢の心地して。うつゝとは思ひ侍らず。それにつき。日頃は山法師のたのもしきよし。兄資名の申侍りしかど。つくづくと思ひみるに。いとも怪しき事のあり。その仔細はと

あたりをみかへり。扇をさしかさしてさやく。  
興さては。事皆公宗卿の謀に出たるか。我もまた大方は推したれば。君をこゝろ易く落し奉らんと。かへりてその事をすゝめ申し。今より君に代り奉る心なり。ゆくては。すへておそろしき戦場なれば、生死のほども測りかたし。契りしこともあだとなりぬ。



といふに局も涙にくれて

「兄はその性よろしからず。君の仇なす公宗卿にかたしへは。いかなることを巧まむも知りかたし。さりどて君に従ひまゐらすこともかなはず、こは何とせん。

と顔に袖をあて泣く。

師時移らはその詮なし。さらば。

第二齣 第一 敷山の行幸

正面三條河原の磧地。あなたこなたに流れあり。河原の前後柳の樹むらくと立てり。敷山の山く夜空のうちには朦朧として見ゆ。月の光かすかなり。花山院中

納言師賢青侍二人舎人一人をぐして、あへきく走り来る。

「我君あれを御覽せよ。はや御車はかしこに見へてこそ候え。供奉の人々は。大方御馬にてつゝき給へりと覺たり。師げに汝か申すこと今一足早かりなば。あの御車に。青あそき事は候はず。近つき給はんことまたしく間に候はん。されど。御馬あらはよからんものを。右近將監信康はいかにしつらん。師あれにみゆるは信康にやあらむすらん。馬に鞭してこなたに来ると見えたり。はやよびとめよ。はやくく。

といふうち。騎馬の侍木の間より馳せ來り。ゆきすき  
んどす。此なたに青侍これをみて。  
青右近將監。君はこゝにましますぞ。御馬はやくまゐら  
せ候へ。君はこゝにましますぞ。

騎馬の侍は馬をとめ。いそぎ飛下り。

青大納言殿におはしませしな。あまり御供奉の遅きゆゑ。  
四條中納言二條中將中院中將早御迎に參れよとの御事に  
て信康これまで參りて候。この馬にめされ候へ。と轡を  
とりて馬をさしむく。師さらは君に追つき奉らん時おく  
れなはそのせんなし。ものともあとより來れ。おくれな

せそ。

と馬にのりまつしくらにかけゆく。

信大納言殿は忠義拔群の御方にましくて。智畧すくれ  
給へは。北島入道と御心を同じくして。此度の御あさま  
しを。かねて謀らせ給へるに。西園寺どのが。いろく  
にさまたけ給ひ。大事の期にあくれ。關東方にせん越さ  
れ。今宵俄の敵山みゆき、何とそ主上には。御恙なくあ  
のさす方におはしませはよいが。  
青しからは。敵山行幸と申は。塵志。我もこれより追  
つき奉らん。いさふれ人々。

第二齣 第二 西園寺の北山山莊

西園寺大納言公宗の北山の山莊の寢殿につゝきたる母屋の廊。殿の女房四人紅の袴小内着にてゐならぶ。これは叡山行幸のあくる日。

女「いかに御達。さためて。きかせ給ひつらん。きのふ主上は俄に御所を出まして。叡山に行幸なりしか。いつも供奉にはつれさせ給はぬ。當御館の上さま。何ゆゑか御所に御といまりあり。今朝また當山莊に御入ありしは。何の仔細のあはしますにや。心得ぬ事にはましますぬか。女「仔細は何とも知り申さぬと。今朝御車にはいつれの

姫君にや。又は禁中の内侍のうへか。若らぬとも。いとも美麗はしき上臈と。御合乗にて御出ありしよし。何かこれには。女「高き聲には申されぬと。それは兵衛局といふ御方。日野右中辨資名朝臣の御妹君こなたの大納言の御は日頃より戀はせ給ひ。いろ／＼と仰ありしかど。花山院の師賢卿と深き御中と申事にて。いつもつれ無き御かへり言とやら。女「それはさためて。めで度き御姿にてあはしますさむが。當御館の妹君。大納言の内侍の君の御うるはしき事は。廣き禁中にも類なしと。誰もく申す事。それに噂にうけ給はれば。御所のうち。御才藝

の名の高き。萬里小路中納言の卿とは。一方ならぬ御契のよし。その兵衛局とやら。とても御館の君には及ひ申すまし。女二さう仰あれと。兵衛の君もどもにちとらぬ御姿。それゆゑにか萬里小路の卿様にも。御心ありと申すものもありとやら。それはおとなき空言と。夕も内侍さまの御いましめ。さりながら賢ききみも戀ゆゑに。一方ならぬ愛き御思。身につまされ御いたはし。とさまくの物賄のところ。西園寺の家司右兵衛尉範常烏帽子水干にて遠侍より出て来る。範常これは女房達。こゝにちせしな。右兵衛尉範常に

候。只今六波羅探題右近將監時益ぬしより二條の御館に使者をさし越し。大納言家に見参して仰うけ給はるべき旨申しかど。君これにわたらせ給ふよし申て候へば。時益の書状持参したるよしにて。範常これを受とり。又使者の申状もうけ給はりたれば。竊に御目を給はりたく馳せ参て候。御申次たまはり候へ。女二かしこまりうけ給はりぬ。さりながら上様は御離ち出にて内々今朝御どもなひありし兵衛のきみと。範いやく。その事にてあらは御物賄の終るまで。まはしこれにて待ち申すへし。御身等は自然めさるゝ御用もあらん。御取持には及び申さ

ぬ。奥に入りておはしませ。

といふにぞ。女房等おのゝ目くはせして。

女「やくなきものかたりに時移りぬ。またかのおそろしの局に。さいなまれん。二女「さらは兵衛どの。女三「ゆたかにおはしませ。四女「いさや参らんとうち連れて奥の方に入る。

あどに兵衛尉範常は。あたりをかへりみて。

範「侍従どの居らさるにや。資各の辨どのより頼せ給へる。妹君の御返事はあらさりしか。幾たひとなく促かさるゝが。いとうるさけれとも。黄かね白かね絹綿まで。

こちらたく給はりしを。そのまゝに置き難し。けふもまた御文を給はりて。懐にして來つれとも。侍従のどのにはねば。これを奉るへきすべもなし。

といひつゝ、懐より資名の文をとり出し。手にとりて妻戸の方を伺ふに。西園寺の御許人侍従といへる年三をじばかりの女房出來りて範常をみてさしより。

侍尉殿よくおはせしな。かねて日野の辨殿より頼ませ給ひし御妹君内侍の殿の御事。妾ほどよく申なして。御文をまゐらせられたれど。御手にたもふれ給はず。そは和殿も知らるゝ如く。萬里小路殿どの御中深ふましませは。

きし給はぬもことわり侍り。さるにても。かの殿はいかになり給ひしぞ。鮎藤房卿は昨夜の騒に。禁中を出させ給ひ。殿山に供奉せしとか。又河内のかたにをはしたりとか。いつれにしても都にはまします。侍さあは妾か。謀は成就せん。喜ひ給へ尉の殿。鮎さても心得ぬ事かな。藤房卿あはさぬとて。俄にこの事ならむとは。侍されは和殿は。兵衛局をみ給ひしや。鮎の吾君の今朝こゝにともなひ給ひし禁中の侍御番殿の御事よ。夕邊ひそかに内侍のきみに萬里小路殿は。あの局に御心ありて。御もとの目を忍ひて。深く契らせ給ふよし申しかは。

世の事多く知り給はぬ君なれば。いつはりとは露しらず。いたく怨みあはします。なほ此うへにも。そゝのかし。辨殿に見かへ給ふやうに謀りなん。鮎あなさかし。こはよき謀そ。さるにても。兵衛局は。吾君の御心に従ふにやいかた。侍なにとて従ひ給ふへき。こはわらはの力にも及びかたし。鮎さなひそ。數の寶を給はらは。御身の深き智慧の海。引き入れではあき給はし。といふに侍従は袖もて口を掩ひ。「さる事も無しとはいふす。されど心強きは兵衛の局昔しのものゝ本にある。貞婦やらん烈女とやらん。もの憎けなる女子なりかし。鮎それに

はあらて吾佛侍従の君に。侍人もや聞かむ。高き壁をな  
し給ひそ。眞むよ。

第二齣 第三山莊の泉殿

こゝは山莊の園のうち離ち出のあつき屋ありそのつ  
つきに泉殿ありて池にのそむ草木いろく植ゑわたし  
うしろの方に衣笠山見ゆ西園寺大納言公宗直衣立烏帽  
子にて兵衛局の袖をとらへ居る局はそをふりはなさむ  
とす。

空女子はよろつ情あるをよき人とはいふぞかして 幾度と  
なくかき口説どもやさしきいらへの聞こえぬは。かの人

を思ふてなるか。さりとは情無し。屋主上昨夜殿山に  
行幸なりしときつるに。大納言殿には。何とて供奉は  
召れぬそ。空今はつしまむやうなし。持明院殿大覺寺殿  
と。帝兩統に分れ給ひしより。とかく大覺寺の御流は。  
關東をにくませ給ひ。主上もいつしか御隠謀の事あるに  
より。公宗天下の亂を憂へ。そのよし竊に關東にいひつ  
かはせしかは。やかて昨夜の御事あり。これよりして持  
明院の御流。代りて御世を知ろし召す。公宗即ち關東と  
心を合せ。天下泰平國土安穩の計略をめぐらさば。この  
身大臣の任にのほり。上なき榮花をきはめなん。師賢の

あつとを退ひ。一生埋れ木になり果るか。又公宗が心に従ひ。大臣の政所といはれ給はんか。今は御身の心にあるへし。胸を定めていらへをきかむ。

ときいて兵衛局は大におどろき身ふるひして。

局さては兄資名かいひしごとく君をすかして叡山に行幸せさせまゐらせしは。公宗卿が關東と心を合せ。君を廢し持明院殿の御代となし。天下の權をとらんとの逆謀にてありつるか。あなちそろしき人面獸心。

公宗は局の袂をはなち座になほりて。

公おろかなる事をいふものかな。時にのり勢を得て。天

下を握るは。これ豪傑のなすところ。女わらへの知る事ならんや。かくまでまことを知らせても、我いふ事をきかざるか。局こは申さるゝまでも無し。國にあたなし。

君に不忠のわぬし等に従ふ可き妾にあらず。斯くどらはれの身となりしうへからは。命はもとより無きものなり。

生死は御身の心にあらん。妾は覺悟をきはめたり。どかう物な仰せられそ。公斯く大事をきかせしうへは。そのまゝにはゆるし難し。一間にどち籠め。右中辨とかたらし。ともかくも計はん。離れかあるく。

ど。呼ぶをきいて隔てのから紙障子をひらきて。



大納言「老はし御まぢあれや兄どの。公老かの給ふは妹の内侍の君にあらすや。何事ありて止め給ふぞ。内侍の事には侍らす。その局は妾か仇にて候へは。「仇とは何の。」「戀の敵の兵衛の局。そのまゝにてはやみ難し。局とはめつらしや内侍のきみ。御いたつきにて御里居ありしとききつるか。御恙もわたらせられすや。といふを内侍はきゝあへず。怒りの色おもてにあらはれ。」

内病にあらぬ恙やある。わらはが里居の間をうかひ。御身は萬里小路どのと文のゆきかひ遊はせしか。局あな

性しかる事を聞え給ふ。妾は花山院どのは。親うものいひし事は侍れども。その他のきみとは。たゞ一言も情しきことをきこえしことはあらずかし。内またまれくと給ふよな。あな口惜し。口惜しや。

と局に搔付て泣伏す公宗はあきれはて。内侍の側にさしよりて。

公「こはまた。何とし給ふぞ。さてもらみし。いまはしや。まづ。その手をはなち給へ。あな氣うとし。むくつけし。内「いや。はなたし。はなち侍らし。屋根も無きことを。何人かいひふらしゝか。おもひもかけぬ身の枉つみ。口ゆ

るしたまへ内侍の君。

とさましくすかしこしらふるほどに。かなたの妻戸を  
あし開きて侍従の御もと出來り。かしこまりて。

侍従「上さまに申上奉る。只今二條の御館より。左兵衛尉  
範常參向仕り。御目をたまはりて。言上すへき事ありと

のこと。空よししく出居の間にゆきて見ゆべし。こや。  
侍従よ。兵衛尉は汝に預けおくそよ。なほさりにな物せ

そ。内侍の君も。あらぬ事をまこととせず。よしなにい  
たはり申せかし。局よ。又こそ。

といひすて、障子を開きて奥のかたに入る。内侍は局

のかたはらをはなれて。上のかたに容を正し。侍従に  
向ひ。

内侍「兵衛尉局とのには。妾なほ申べき事のあり。おもとは。  
局をともなひ申て。一間所にとち籠て。人になあはしそ。

兄君の仰なりとも。妾かゆるし申さるうちは。御目前  
に出すまし。心得しか。侍従「かしこまりて承り侍る。い

さ兵衛の君。こゝ立せ給へ。局こは何とせん。侍従「さ  
なの給ひそ早とく。

第二齣 第四山莊の寢殿

内侍の寢殿。正面に壁代あり。左のかたに。几帳を建

つ。右のかたに。厨子をならへ。卷敷をそのうへに置  
く。内侍燈臺のもとに座す。

「藤房卿は。昨夜主上の供奉として。殿山にもむき給ひ  
しとは。きつれども。妾はさまの目。いたづきにより  
て。里居したれば。昨夜のさむきをきしらす。彼卿の  
妾に。唯の一言も仰せ置れぬは。あの兵衛の局に。御心  
うつしゆゑなるか。いつれにしても。只にくきはあの  
局

といひつゝ。あたりをみまはし。厨子のうちより短刀  
を出し。燈の光によりて。抜放ちうちかへし見て。

「故殿より賜はりし。此さやまき。斯る末の世には。いか  
なる事もあらむも知れすと。秘あきしが。今宵の用に立  
むどは。

といひなから。鞘にをさめ。立ち上らんとするとき。  
次の間の障子を開き。侍従出で來り。内侍のさまをみ  
て。

侍内侍の君には。御顔色も常ならず。いづくに御出遊は  
すや。上さま只今籠常を御供にて。二條の御館にかへら  
せ給ひぬ。そのをりかへすくの仰あり。氣疎き事をな  
遊はしそ。内侍従のちもどか。仔細ありて。局の御許に

まゐりて。申べき事のあり。さまたけすな。そこのき給へ侍局に御遇あらせては。侍従の落度になり侍らん。御心を静められ。今宵はこのまゝに。内妻かいふ事をきかざるか。誰かあるこゝへ来よ。と聲高く呼び給へは。唯といらへして。二人の女房出来る。

「侍従には。心にかなはぬ事ありて。目前を退くるそ。はや引立てこゝ罷出よ。どうく汝達下屋にありて籠置きぬ。ゆるがせになせそ。侍こはくいかた。女侍従のおもど。内侍のきみの御氣色ぞ。」

第二齣第五 同し北向の曹司

折めくらしたる廊あり。庭には艸木むらくと生茂り。曹司のまどみをあげ。このうちに。兵衛局物思ひたる風情にてよりふすところ。

局さても世にはかなきものは女子にそある。禁中にありしとき。大納言の内侍のきみとは、一方ならず睡ましき中なりしに。けふは俄に藤房卿の御事を。疑はれて。思もよらぬあの騒ぎ。あの侍従とやらんか。さかしらなむとは思へども。日頃よりかしこき人といはれし内侍の君。俄にかはりしあの風情。心得ぬ事てはある。

と斯くかき口説うち。大納言の内侍は。小うち着ぬ  
きすて、手に短刀をもち。明障子を開き。つと入りく  
る。

内兵衛の君に妾か申入たき事ありて。忍びてまゐり侍り  
しそ。扇とは。内侍の君にはまじませしな。尤ほと。い  
ろくに申わけせしごとく。御恨の言の葉は。少しも覺  
無きとなるを。またも去うぬくおはしませしか。

どにげんとするを。さしよりて。裾引きとゝめ。

「妾が心のまことをは。告げまゐらせんと。参りしそや。

まづ御心を鎮められ。こゝに妾が申言。徐かにきこ

しめし給へ。

扇はまばし打案じて。もとの座に居直り。襟かきつく  
ろひ。

扇さては仔細のありし事か。さりとは老らず。なめなる  
ふるまひ。そこそ氣疎く思ひ給はめ。はづかしや。内な  
めなりとは妾の事。兄をも人をも欺きて。御身の危難を  
救ひまゐらせんと。ことさら嫉妬の躰につくろひ。扇さ  
ては。今までまことに。御怨ありしと思ひしは。内の給  
ふごとく。人を遠さけ。竊に妾が誠心を告げまゐらせて。  
今宵のうちこゝを落させ申さむため。計畧にて侍る

ぞかし。さりながら。女の身に。はしたなく。のしり  
 狂ひしあの有様。さぞあさましと思ひ給はめ。今さら思  
 へばはづかしや。屈さても驚きいりし御智恵のふかさ。  
 御心根の雄々しさよ。然すがに。藤房卿の思ひ人。妾と  
 ときは。懸ても及ばぬ内侍の君。さるにても守りまびし  
 き此山莊。いかにして忍び出む。内その事ならば。御心  
 やすかれ。かねて用意して候そ。こやそこに候。左近將  
 曹光繁こちら來よ。光かしこまり承て候。  
 と前裁の木陰よりあゆみ出る。直垂のうちに腹巻して。  
 太刀を帶たり。

内局はさそや。驚かせ給ひぬらん。これは。花山院殿の  
 御侍光繁にて候ぞ。光大納言どのの仰をうけ給はり。竊  
 に局の御ゆくへを尋奉りしが。西園寺どのに召しつれら  
 れ。この山莊に御入りと承り。御構うち忍び入り。  
 思はず内侍の君に見参しくはしく御様子きかせ給はり。  
 此處にかくれ伏し御消息を待ち奉りてこそ候へ。屈のこ  
 る限なき。内侍の君の御めぐみ。世にありがたき御恩に  
 こそ。さて又師賢卿藤房卿には。いづれにあはしました  
 るぞや。光吾君には敵山行幸の供奉として。出させ給ひ。  
 萬里小路どのは。笠置の方にむかはせ給ふとうけたま

る。内主上には。敵山に行幸なるに。何とて藤房御供には候はぬぞ。是これにはくさく仔細ある事。密事なれば。

と内侍の耳にさしやく。内侍心落居て。

内侍「さらば君には。是妾はまばし大和の方に身を忍び。世の治まるを待ち侍らん。只心にかゝるは内侍の君の御身の上。内我身の事は必ず御心になかけ給ひそ藤房卿の御父君は持明院殿に昔より親しうおはしませば。かなたを頼み奉り。めでたく還幸あるときまで。操を守り愛きを忍び。君の御運の開き給ふをいのり申さん。光そろひ

もそろひし。二人の姫君。名ある賢女貞婦といへど。斯くまでにはおはすまし。光繁長なから感服仕りて候。是然らはこれにて御別申さん。

と立上り給ふを。内侍は引とめて。

内亂たる世のはかなさは。いつまた。ま見えまゐらすへき。この鞘巻は妾か亡父よりゆつりを受けしものなれども。ゆくさきくも敵の中。御身のまもりたまゐらせん。

とて前の短刀をさし出し給へば。

是かさぬくの御めくみ。

ともし戴きて。旅の装などしたため。光繁御供申すを。内侍は見おくり。袖を顔に當て。

第三齣第一唐崎の濱邊

眞向に大きな松の立木あり。その枝廣こりて翠の色をなす。そのうしろは。琵琶湖の水はるく見やられ。湖上の山烟のうちにつらなる。此松のほとりに。鎧武者法師武者。あまた得物くをもちて立ならぶ。岡本坊いかに方く。此度主上北條高時法師御誅伐として。去る廿五日我山に行幸なりしに。六波羅の奴原。我三塔の英氣をおそれ。容易に軍馬をさし向けす。やうや

く今日に至り。追手は赤山の麓。下り松の邊へ四十八箇所箒に畿内の軍兵を差添て。五千餘騎をもつて攻寄たり。桂林坊また搦手の當所へは。佐々木三郎判官時信。海東左近の大夫將監貞範。長井丹後守宗衡筑後前司貞知。波多野上野前司宣通。常陸前司時朝に美濃尾張丹波但馬の勢を従はしめて。七千餘騎。大津松本を経て押寄するよし。注進ありて分明なり。記左衛門武固山山には供奉の公卿四條中納言隆資卿殿上人には二條中條爲明中院左中将貞平を始め。數ならぬとも先陣として。左衛門尉武廣。矢野大塔宮の伺候人矢野の彦七忠資等。その外強勇無雙



の荒法師。その勢こゝに三百餘人。快敵の多勢に比ふれは。十か一には足らぬとも。眞佛法の爲にその身をわすれ。王法の爲に命を捨てんと。眞先駆て馳せ出たり。武あれく敵の先陣となたを指してよせたるそ。彦日頃の手練は今此時。いて弓勢を見せてくれん。

矢を番へ。戈を横へ。太刀を抜き。喊をあげて敵をまづ。六波羅方の大將佐々木時信その手の兵を引いて押し来る。

眞山法師等はかしこにあるそ。思ふにも似ぬ小勢なり。一人ものがしなせそ。進めやものとも。進めく。

兩軍入り亂て戦ふ。勝負を決せず。

第三齣節 第二回し濱邊

唐崎の松をや、遠く見る岸の邊に茅原あり。京方敗北して軍勢逃れ走るに。海東左近將監貞範獨ふみ止りて。追くる敵をきりちらしたる處なり。

海小勢の敵と侮りて。先手の軍懸勢散らされたるそ無念なる。續けやものども。と呼はりて三尺七寸の大刀を振射向の袖を差かざし。追くる法師武者二人を斬倒し。波打際に立。

「六波羅殿の仰をうけ」一陣にすゝみたるは海東左近大夫將

監貞範なるぞ。我と思はんものは出あへく。と罵る。  
 こゝに岡本坊快實袈裟にて頭をつゝみ紺絲威の鎧を着  
 下し。二尺八寸の小長刀をふりまはし馳せ來る。  
 快「一天萬乗の君に敵し奉る。逆徒の海東。坂本様の拜み  
 切。長刀のきれ味見す可きぞ。いざ参りさふ。とまばら  
 くいどみ戦ふ快實遂に海東をきり倒す。敵陣のうちより。  
 年十五六の兒髪を唐輪に上げ麴塵の筒丸大口のそは高く  
 とり黄金作の小太刀を抜て。快實に走りかゝり。胃の鉢  
 をえたゝかに。三打四打うつ。快實すこしも動かず。快や  
 あ敵ながらも健氣な小童。名のれ名のれ。兒は太刀をそ

ばめ。きど快實にむかひ。  
 幸若丸「我は只今汝に討れたる。海東將監が一子幸若丸。父  
 のかたきの岡本坊。尋常に勝負せよ。といふに快實は長  
 刀を突立。つくくどみて息を衝き。  
 「和殿の父を討取たるは。戦の習。是非もなし。御身ほど  
 のやさしき兒を。打留たらんは。法師の身にとりて情無  
 し。さりとて。萬乗の君にたのまれ奉りし此快實。みだ  
 りに。御身に討る可きに非ず。所詮勝負は無益なり。と  
 く落られよ。はやとくく。  
 といへども兒は聽入れず走りかゝりく手繁く切る。

供「こはきゝわけなしよしくさらば。と長刀の柄にて小  
太刀を打落し。組どめんとする所に。流矢飛來りて兒の  
胷板に中りて倒る。海東が郎黨三人後れ馳にかけ來り。  
これを見て。

郎黨「あな無慙や。なさけなや。大殿がいたく叱りとめ  
給ひしを。きゝ給はず。見物衆にまきれておはせしに。  
斯くははかなく討れたまふか。郎黨「いで。此の上は主君  
の敵。そこなる法師郎黨「その御首を我等にわたして。勝  
負く。

「心得ぬものかな。御邊たち。敵の首をこそとらんずるに。

味方の首をほしがるは。ぶけ自滅のこれ瑞相。ほしから  
ば。すはとらせん。と海東の首を投出して。きつてかゝ  
る。敵はさんく戦ひきり立られて退くを。快實逐んど  
す。うしろの方より。一人の法師武者出來り。

「快實堅者。まばらく待れよ。座主の宮の令旨に候ぞ。  
まばしくと呼はるにぞ。快實はふりかへりみて。

「悠さいふは。淨林坊兼譽阿闍梨なるか。同宿らの手柄に  
て六波羅勢は散々敗北。この機をぬかさず。追撃して。  
大將。佐々木時信を討取らん。何ゆゑにとめ給ふぞ。  
鷹鷲鼠かへりて猫を食むの長追なさは過ちあらん。一ま

づ山へ引上られよ。宮の令旨に違背せられな。こゝは豪  
譽が。受取たり。諸軍を下知して歸山せん。御身のはや  
く引上げ給へ。

然みすく勝利あり乍ら。引上んも口惜けれと。令旨と  
あらは是非に及はす。我同宿の法師原壹岐矢田の兩人も。  
唐崎の松のもとに陣したれば。令旨を一同に申きかせ。  
諸共に凱陣すへしと。まづくと立去れり。あとにのこ  
りて。豪譽は志すまじたりと打笑ひ。  
兼かねて。六波羅殿に内通し。主上山門に臨幸なるに及  
ひ。同志のものをかたらひて。不意に起りて。とり奉ら

んど。思ひしかど。六波羅の長詮議に日を費し。あまづ  
さへ。先手の京方敗走し。手はずは少し違ひしかど。令  
旨といつはり。快實等を引もとしたれば。心易し。なほ  
このうへは。西園寺の侍左兵衛尉範常どかたらひ。後の  
計畧をめぐらさん。

と腰より呼子笛をとり出し。これを吹く。かなたの葦  
の陰より。左兵衛尉範常。鉦直垂に腹巻して。あゆみ  
来る。

眞淨林坊。かねて西園寺殿より。仰示されたる計畧の如  
く。主上只今西塔の釋迦堂にましますは。和僧ははやく

三塔に觸れられて。同志のものととも。異議を唱へ。本院に移し奉ると稱し。俄に起て風箏をとり奉れ。さすれはそれに合圖として。追手搦手一同に。きつて登り。青公家はらはいふに及はず。その與同の法師原を皆盡く討取りて。關東の御恩にあつからん。よく／＼計らせ給ふへし。

其その義を佐々木判官に通し申さんか爲に御身の來るをまちしなり。えからは。いよく／＼今日の夕暮。その手はづに及へし。このよしいそき大將に膝し合されよ。無尤も／＼。成程首尾よく致されよ。塵いふにや及ぶ。心得

たるそ。

第三節 第三 殿山西塔の釋迦堂

右のかた大なる樓門あり。この奥のかたに。大殿の礎聳えて空に高し。これ西塔の釋迦堂なり。この前後大木生茂り。山々層りて見ゆ。門前に四條中納言隆資衣冠にて立。山法師淨林坊阿闍梨豪譽と物語する。隆資のうしろに。烏帽子直垂に腹巻したる六位の侍二人あり。豪譽の後にも。法師武者三四人あり。鷹御坊俄に出仕し給ひしは。合戦の注進なるや。また隆資に對面せんといはるは。いかなる子細の候ぞ。兎徒

はすでに敗走しつるとき、たるに。あわたいしく。物仰  
らるゝは。定めて容易ならぬ事候らん。とうく仰候へ。  
鷹さん候。御座所を移して本院に行幸を成し奉らんと  
事に候。鷹そは何故ありて「然れば。壽永のいにしへ古  
白河の院山門を御頼みありし時先横川へ御登山ありしか  
ども。やがて。東塔の南谷圓融坊へこそ。御移りありし  
が。且は先蹤なり。且は古例なり。爰に西塔を皇居に定  
めらるゝ條。本院面目なきに似たり。はやく臨幸を本院  
になし奉らんとこそ存じ候へ。鷹こゝに臨幸ありしは御  
路次の御都合によりてなれば。あながち思召ありての事

ならず。されども西塔の衆徒等。領諾これなきに於て。  
その義如何候へき。鷹そははや子細候はず。臨幸の事  
送して。すでに異議なし。仙躰を促さんか爲に衆徒こゝ  
に参列す。はやく龍駕を廻らされ候へ。鷹さあらば。  
この條直に奏聞に及ばんまばし御待あれ。  
隆資は六位の侍を従へて門の内に入る豪譽うしろをか  
へりみてさしまねき。  
「やあれ人々謀は成就せり。いそぎこれに御参りあれ。  
木蔭にかくれたる六波羅の武士及び法師武者あまた出  
来る。

左兵衛「さては念主上の風箏をとり奉るべき期参れるか御坊の功賞すべし。者ども風箏出るとみるならば駕輿丁等をうちすゑて。君を奪ひ奉れ。さふる奴輩一人も逃すまいぞ。兵士「かしこまりて候。いで我々が手柄のほどをみせ奉らん。

警蹕の聲いかめしく葱花箏をかきて白丁六人門のうちより出で来る四條中納言隆資二條中將爲明中院左中將貞平衣冠にて供奉す左近將監信康直垂のうち腹巻す武士法師等皆兵仗を持って敬禮せず隆資これを見て。歴宸儀これにましますぞ。何とて敬禮を行はさる無禮不

遜の山法師。爲明「天道を恐れぬ不敬の振舞。貞平「はや兵仗を投棄て。稽首禮拜致し候へ。信康「猶豫あらは。罪はのかれじ。いかにやいかに。

阿闍梨蒙齋すもみ出で。

齋あろかや。四條中納言。昨廿七日。持明院の本院春宮。六條殿より。六波羅の北方に御幸なり。今出川前右大臣兼季公西園寺大納言公季卿を始め。公卿殿上人あまた供奉せられ。日ならず御即位の御事あるへし。さらば主上ははや御位を下らさせ給ふに。これ同じ。いまた太上天皇の尊號を上らさるに於ては。たゞ一つの宮原に異な

らす。こゝをもて。豪譽等探題の下知により。御輿を六波羅に入れ申さんと參上せり。御猶豫あらばせん方なし。御輿ををかし奉るそ。

隆資爲明貞平等さへへんど。御輿を立へたつ。豪譽は法師武者等に目くはせ。さへふる人を突き退けて。御輿に近く。此時山風さつと落し來て。御籠を吹き上ぐ。籠中より聲ありて。

「阿闍梨豪譽はらくまで。

豪譽山法師等驚きおそれてはらくと退き俯伏す。輿のうちより衣冠したる人出て。

「從二位大納言行陣正尹藤原師賢。漢の紀信か例に倣ひ。かけまくも畏しき主上の御身代としてこゝに在り。いさ六波羅にもむかひ。はや／＼案内仕れ。

豪譽これをみて。齒噛をなして大に怒る。

「こはいかに。こはいかに謀りし事は裏うへにて。謀られしか口惜しや。さるにても。いつの間にか代られしそ師賢卿。

師「げにいふかしく思はれん。吾行幸にあくれ奉りしが。馬をいそかせ。法勝寺の前にて追附委細を奏聞せし所。慥感ありて袞の御衣を賜はり。斯くは汝等を欺きしぞ。



今のはやまてなり。疾く捕子として。六波羅に引立ゆ  
け。臣死す。眞平はやくからめよ法師原。

斯る處に。八王子より護性院の同宿殿實使者として馳  
せ來り。豪譽に向ひ。

「豪譽阿闍梨に申し奉る。先刻何ものか内通しけん。大塔  
の宮妙法院の宮は。矢田彦七豊岐三郎左衛門淨林房快實  
妙光坊の小相摸等を御供にて。はやいつかたへか御立退  
きに相成りて候。かたかた御油断ある可らず。  
右兵衛尉範常は大に驚き。左右をみかへり。

「さては。事皆相違して。宮々は皆落られしか。いで此上  
はその青公家原の首を刎ね。六波羅殿に奉らん。いさふ  
れものども。

一同さわき立て。かけよらんとするをおしどめ。

「はやり給ふな兵衛尉。すてに大事の人々を。取り奉る  
ことかなはぬに。この卿達を失ふとも。また何の益ある  
へき。ましてや朝廷の貴人を害し申さは。山王七社の神  
靈にも恐れあり。必ず疎忽のふるまひ有可らず。いかた。  
師賢隆資の兩脚をりしめ。いつれも指す方に赴き給へ。  
決して無禮は加へまし。

眞敵なれども。情あるその言は。眞さらば我々は主上の御行へを尋ね奉り。爲明「山を攀ぢ谷を越え。いかなる艱苦もたへ忍ひ。眞平信康「天下の爲に力を盡さん。眞方々さらは。

(完)



尹良親王

御醍醐天皇の第三の皇子宗良親王と聞えしは。初妙法院にて御出家ありて。注名を尊澄と申し奉り。のち叡山の坐主に補せられ賜へり。御父帝北條高時が暴威を挫き。公家一統の御世に爲んと思召立して。その事やぶれて。叡山に行幸なりしかば。親王かひくしく。法服を脱ぎて。甲冑を帯し。防ぎ戦ひ賜ひしが。帝の行幸は。もとより。敵を欺く謀にてありしかば。衆徒遂に叛きまゐらせしにぞ。親王は山をのがれ出て賜ひしかど。北條氏

の爲に捕はれ。遠江の國に流されさせ賜ひ。憂き年月を送り賜ひしに。北條氏亡びたれば。歸洛あり。もとの姿に立もどらせ賜ひ。御名を宗良と改め。上野大守に任ぜらる。幾程も無く。足利尊氏、君に叛きまゐらせしかば。征東將軍に任じ。延元元年たよりに就き。遠江の國におはしましたればこの國の武士附従ひしに。井伊谷の豪族井伊介道政といふもの。親王を己が館に招し。御座所をしつらひ。己が娘たりける。千代姫といふを參らせ。いとまめやかにかしづきければ。一年ばかりを経て。この千代姫の腹に。御子生れさせ賜へり。これぞのちに。智

勇をかね備させ賜へる。尹良親王にぞおはしましける。されば宗良親王御還俗の時に御息所を迎へさせ賜ひて。興良と申す御子ありしが。去るとし身まからせ賜ひて。その後諸國の亂うちつゝき御息所もかくれ賜ひしにぞ。年経れども。御身近く仕へ申すものなかりしが。井伊谷におはします頃は。はや御年六十のうへを越させ賜ひしに。千代姫は二十あまりにて。いとめづらかに。男御子を生み奉りければ。喜ばせ賜ふと大方ならず。七八歳にならせ賜ふをまちて。學問武藝を教へ賜ひしに。聰明敏智にましくければ。あとなも及ばぬほどの。御才かし

こく。ゆく末頼母しく思し召されける。  
 斯る所に宮は一日外邪の爲に病の床に臥せ賜ひした。  
 日にまして頼み少く。元中二年八月十日御年七十三にて。井伊谷にかくれさせ賜ひぬ。今わの際に尹良親王を御枕邊に招き。その坐に侍る。井伊介道政の子高顯。世良田右京亮政義。桃井安藝入道宗徹等をみかへり賜ひ。やよものども。宗良不肖の身をもて。先帝の勅詔を蒙り。征東將軍の宣旨を賜はり。兎徒征伐

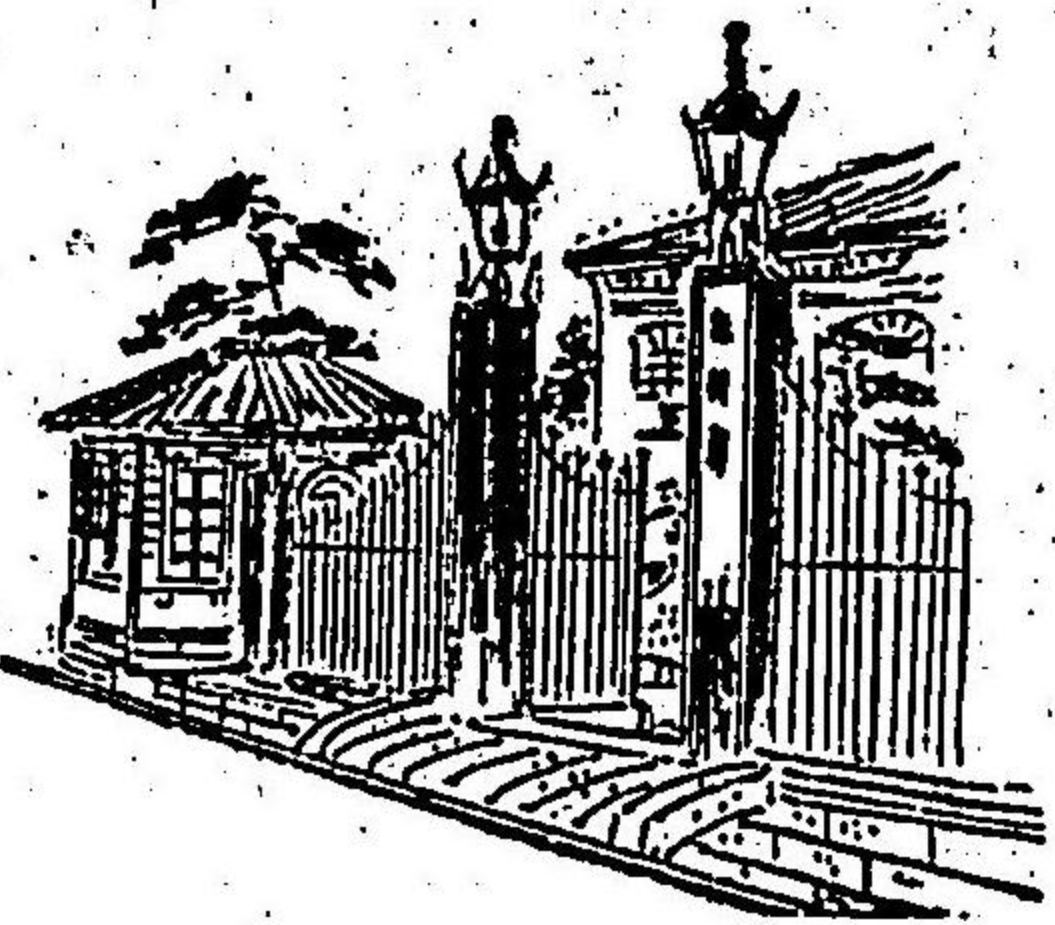


の爲にこの地に下りしかど。もとより智勇は。いたく兄にておはします。大塔の宮殿下に及ばず。まして兎徒の勢年々に加はりて。いづことも。敵地にあらざるは無く。井伊介が父子二世命を軽くし。義を重くして。日夜に兎徒と競ひ争ひ。戦をいたすといへども。不幸にして勝利を得ず。空しくこゝに命を終ること無念なれ。尹良はいぬる日。今上の御猶子として。親王の宣下あり。今年十五歳になりぬ。幼しといへども。その志は父にもまされりと覺ゆるぞ。いかにもして高顯政義等その餘の人々と力を合せ兎徒征伐公家一統の謀を運らし候へ。道政は先

つ年身まかりぬと雖も高顯かくて在るからは。その旗下のともがら。背くものありとしも覺えず。千代姫は女ながらも。雄しき性なり。やよ猛き心を振り起して。よく尹良を内にたすけて。我遺訓を忘れなせぞと。事細やかに仰ありて。のちは一言も宣ふとなく。唱名まづかにして。終にはかなくならせ賜ひぬ。親王を始め奉り。千代姫は申もさらなり。これまで従ひまゐらせし兵どもの歎きは。筆に盡すべくもあらず。今事省きて審にせず。此頃遠江駿河兩國は足利の家人今川伊豫入道了俊の所領にて。ありけるが所領を分ちて。その従子に遠江の守護

をゆづりて。遠江守貞秋と名のらせ。同國敷智郡引馬に在城し武威を振ひけるが。井伊谷には征東將軍のあはしますをもて。まばく戦を挑むといへども。井伊道政よく拒ぎ戦ひて。容易に落されず。また國中の武士も。心を官軍に寄るも少からねば。なましゐに城攻して敵背に起らば。一大事なりとて。まばらく軍をといめて。その領地を犯すと無し。こゝに今川家の郎黨に蒲原右近太郎範兼といふものありけり。もどこの地の豪族にして。田圃あまた領し。家の子多く養ひ。遠江の國にては。更無き富有の家にてあり

き井伊谷とは程遠からず。あのくその勢をあらそひて。互に威を張りけるが。範兼は公家の勢衰るをみて。はやくも。足利氏に付き名簿を守護の今川了俊にまゐらせて。その家人とはなりてけり。道政はその祖先遠江介に拜任しけり。工藤爲憲の子孫にて。今に至るまで。井伊の介と世に稱せらるゝ名家なれば。世の勢に已事を得ず。鎌倉殿に従ひしかど。もとよりその志に非ず。蒲原左近太郎の父は左近將監とて。もと鎌倉の將軍成良親王に事へて



この地に出仕しけるものなり。志かるに足利の家人なる今川了俊の奴僕となるこそ淺間しけれとて。いたくこれをのゝしりしかば。兩家の確執ますく甚しく。いつも今川の先陣には蒲原が手にて戦をはじめたり。志かるに道政病みて世を去りつゝきて。宗真親王にもかくれさせ給ひしと。きこゑしかば。範兼大に喜び。いまは恐る可きにあらず。いで一戦に伊井谷の城を踏みやぶりて。尹真親王を生捕り奉り井伊が子高顯を討取り親王加擔の奴原を盡く誅戮して。かの所領を恩賞として。今川殿より賜はるべし。あはよくば。そを功として足利殿に出仕し。

守護代に補任せば。我はこの地に世々住めるものにて。今川氏は。了俊入道はじめて入部せられし新守護なれば。一國の權柄必ず我手に落つべし。唯この擧の勝敗にて。我家の盛衰定るべしと。竊に心一決して。或る日引馬の城にもむきて遠江守貞秋に對面し。南北の御争ひも。はや三代を歴させ給ひ。天下は大方足利殿の御手に屬して候つるに。此國には。なほ征東將軍とて。おはしたれども。それも去る日薨御あり。その御子あれどもいまだ十三歳にて。何事も御供に候ものゝまゝたり。今川殿にはまはく御合戦ありしかど。はかばかしき事も無くて。

今に至るまでかの一黨のみ。御手に従がはず。あはれ。御加勢を給はりなば。範兼不意にあしよせて。討取り申べしと請ければ。貞秋まばらく思案し。げに和殿のいはるゝ事ならば。將軍薨し給へども。その手の武士等なほあまたあり。敵ながらも。智勇に富みたれば。和殿いかに謀るとも。容易に勝事を得がたかるべし。詮ずる所は。南北御和睦の事に及ぶべきよし。内々聞えあれば。その時に及びて。理義をもて。城を受取り。一國平均の事に至るべし。今はその時に非ずといひけれども。範兼。いな。大内右京大夫義弘御和睦の事を取持たるゝよし承る

といつども。南帝御承引なきよし。たしかに申ものあり。斯くてむなしく歲月を経候ひなんには。一國の武士ども。あつから南方に靡き従ひ。忌々しき御大事なるべし。いそぎ思召立せ給へど。切に請申しけるにぞ。貞秋も道理に折れて。さらば援兵八百餘騎をつかはすべし。かまへて。敵を侮るべからずとて。腹心の郎黨なりける朝比奈十郎秋泰といふものに命し。精兵八百餘騎を従がへさせ。蒲原が居城なる板澤城にぞつかはしける。この城は城東郡に在りて。伊井谷は同じ郡なれば。忍びや



かに軍馬を彼處につかはして。一時に起りて城を圍むどきは。これに應援する者も無く防戦の用意する暇も無るべしとて。斯くぞ計らひける。尹良親王は當年十五になり給へども。生れて聰明の君なれば。父王隠れ給ひしより。井伊介高顯世良田右京亮政義によるずの事を語らひ給ひて。日夜恢復の御軍議ありけるが。ある時親王の仰せ出さるゝやう。父親王薨去ありしかば。敵は必ず。その虚に乗りて討て出づ可きに。さらしその様子が見えざるはいかにしても不審なり。高顯政義の意見をきかまほしとありければ。高顯うけ給は



り。今川遠江守はいまだ年若けれども。丁俊入道は謀略  
 深き古兵にて候へば。容易く軍を出して。また先度の如  
 く不覺を取らば。世の物笑になるのみならず。一國の武  
 士官軍に應ずる事もやあらんと。危みて。攻寄せざるに  
 も候はんといふに。政義は進み出で。介殿のいはるも  
 も。その理無きにあらぬと。丁俊は智略深く。またその  
 従子たる貞秋も志慮あるものなれば。いかなる手段をも  
 て。戦を挑まむも計り難し。所詮間諜をかの地につかは  
 して。敵の動静を探るべしとて。政義が心腹の武士物習  
 れたるを敵地につかはし。その形勢をぞ探らせける。

一兩日ありて伴の武士は駆けかへり。引馬城にては。近  
 日合戦を催すべき支度なんぞはさらに見え候はず。唯去  
 る日蒲原左近太郎が俄に出仕して。明る日まで。己が館  
 に歸らずと承て候。その外何の沙汰も聞き候はずと告げ  
 れば。政義思ふよしあれば。その事必ず人に漏すなど  
 命じ。さてその夜親王の御前に出て。高顯等と當城追手  
 搦手。ならびに敵の寄せ來ぬべき山手溪川等の繪圖を開  
 き評議を凝し。さて此度は斯く謀はせ給ふべし。さらば  
 かゝる事こそよく候はめなど。親王に言上しければ。親  
 王も領かせ給ひぬ。こは何事やらん。近侍の人だに聞く

ものなしとぞ。

元中の二年九月廿四日の

夜浦原範兼は。かねて引

馬の援兵の大將なる朝比

奈十郎秋泰とにも。忍

びやかに己が居城を發し。範兼は追手に向

ひ。秋泰は搦手に向ひ。深き山路を事ども

せず。秋泰はまつ城を去ると。五町ばかり

なる谷川のほとりに至るに。木の間より。

ちらく續松の光見えけり。さては城中より。今夜の夜



討を親ひしりて。逆よせに来つるや。物ども。油断すべ

からずと。谷の巖石によりて。軍兵をよきほどに布き列

らねて。まち居たりしに。近よるまゝに。軍兵にはあら

ずして。胴服に烏帽子したる侍二人手に續松を照らし。

谷の向にあらはれて。人々聊示あるべからず。これは城

兵には候はず。竊かに御陣に申すべきことの候て。忍び

來りしものに候。いさ御覽候へ。かくの姿にて。多人數

には候はずと。いひつゝ續松もて。己が身を照らし示し

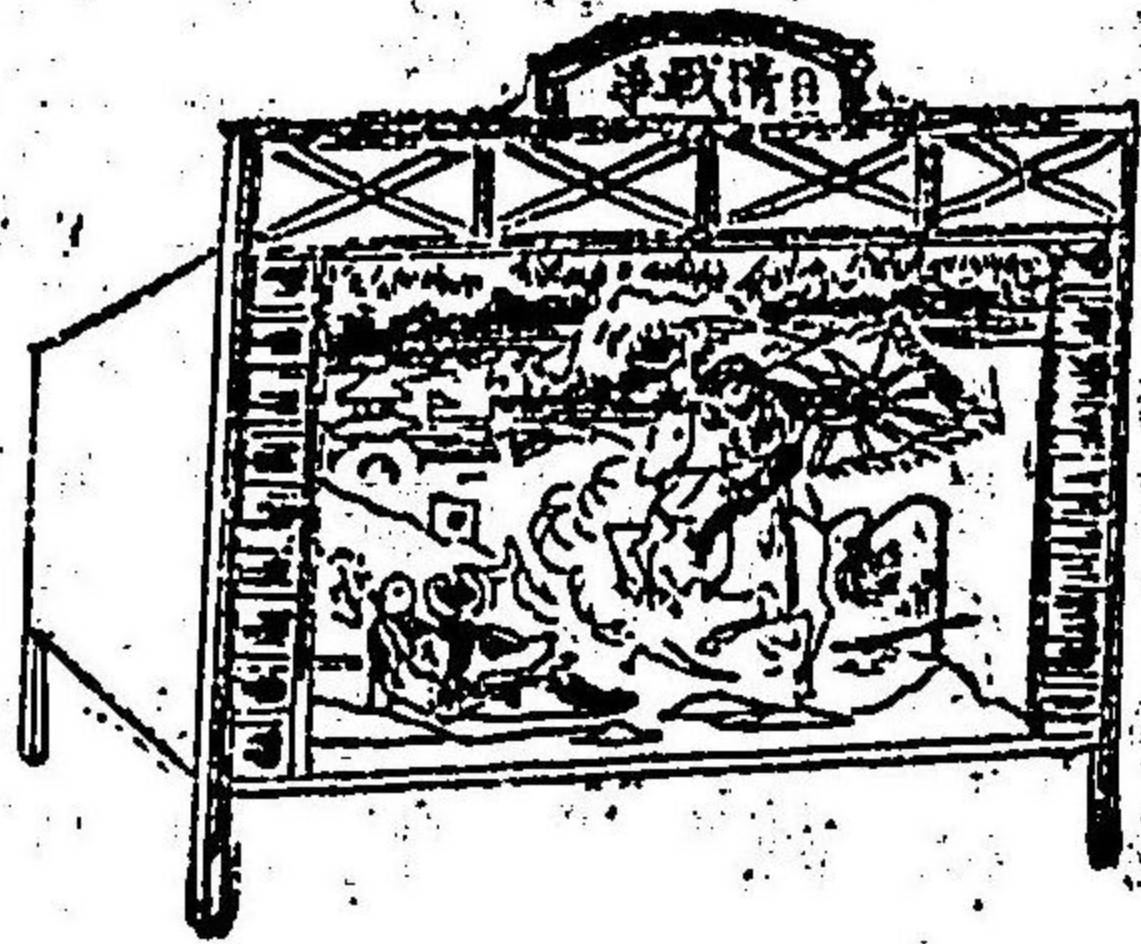
ければ。もとより廣き谷ならねば。その形分明に見えけ

るにぞ。さては城兵にはあらざりけり。さるにても間諜

なるも測りがたし。ものどもはやくかの奴原をこなたに  
 渡して。仔細を尋ね候へど。先手の兵に大將秋泰下知し  
 ければ。畏りぬと。十人ばかり。岩に足を踏かけて。水  
 を渡すに。さまで深き谷にあらぬば。はやくもとなたに  
 ともなひ來にけり。さて秋泰が息ひたる所に引來り。續  
 松の光の下につらくみるに。げに平服にて一刀を腰に  
 せし田舎武士とみゆるものなれば。汝等はいかなるゆへ  
 ありて。吾陣に推參しつる仔細をつぶさに語り候へどあ  
 りしかば。かの武士はおそるく。我等は井伊谷のほと  
 りなる野武士で候が。近頃城中に駆け入られて。追使は

るものにて候。志かるに故大王薨去ありてのち。城中い  
 づれも一致せず。各一手の大將と稱し。野武士等を責め  
 はたり。唯その身を役使候のみに非ず。臨時課役に米錢  
 を掠められ候がゆゑに。誰とて怨條ぬは無し。此の度今  
 川殿より征伐これあるよしを承りて。又候兵糧として。  
 我等が蓄たる米穀を積入れ。又内々今宵の夜討を間諜  
 をもて窺ひ知り。竊に軍議を凝らされ。伏勢をもて。か  
 しこの山路より。此御陣の背を撃ち。また追手の御勢を  
 も。途中に於て遮り撃んと謀られ候。此儀は極めて。秘  
 密にて候ひつるを。我等が弟にて候もの。親王の御もと

に近く仕へ候て。物越に承て候により。唯今我等一黨野  
 武士返忠の引出物として。この密謀を告げ奉るにて候。  
 はやく御計略を運らされて。一舉に城  
 に攻入り給はされば。城兵に挾撃せら  
 れ御一大事に及ぶべしと告げれば。朝  
 比奈秋泰大に驚き。さては城中には。  
 早くも夜討と曉りて。反りて我が不意  
 を撃んとするにや。この返忠のもの無  
 らましかば。思はぬ大敗に及ぶ可かり  
 した。危ふかりしといひつゝ。然らば汝等が黨類が謀に



て城を落すべき術やあると問へば。さん候。城兵は二の  
 廊。一の廊の衛ども。あのおの五百餘人はあり。いづれ  
 も屈竟の精兵なるが。今宵御陣の背より攻撃んとて。一  
 廊の兵は追手より。間道を経て。蒲原殿の手に向ひ。二  
 の廊の兵はこれもまた。山路を攀ぢて。先のほど此陣の  
 背に廻りて候。かゝれば一二の廊はすでに残の老兵十餘  
 人の外は候はず。よりに我々が一黨二の廊の門を守りて  
 候へば。竊に間道を経て。門のうちに御勢を導き候はん。  
 さて一の廊なる城兵は盡く討取り給は。のこるは本丸  
 のみにして。こゝには親王及び井伊介高顯その餘の郎等

籠り居れども。はかくしき兵は先刻城を出で去りて。防ぐもの有りども。恐るゝに足らず。一舉に攻めとり玉は。かの城はやく御手に入りて。親王を生捕んとたやすかるべし。まかしてのち。城中より討て出で。城外のやつばらを討せ玉は。假令勇者ありども。主將を我手に生捕らば。その餘は首なき蛇に同じ。恥あるものは討死し。かひなき者は逃失せ。唯一夜にして。大功あらん。時刻うつらば。脊後より城兵に襲はれなば。そのかひなし。はやく御討立候へといひければ。秋泰大に喜び。そはまた意外の幸なるかな。さらばうち立とて。かの野

武士二人を案内者として。谷川をうち渡り。木の間をくまり岩間を傳ひて。五六町ゆくほどに。果して城に近き岩の狭間に一つの門ありけり。その時野武士はあしをといめ。秋泰にうち向ひ。この門を守るものは。即ち我等の同腹のものなれば。唯今開きて入奉るべし。まばし待せ給へとて。諸勢をとめやがて。門をほとくと打敲くに。かねて用意やまたりけん。内より火をほのかに照して。開き出迎しにぞ。野武士は何やらんうちさしやきければ。門守の武士はやくも心得ていざこなたへと。秋泰等の諸兵を招き入れにけり。秋泰の兵士等八百餘人を

の人数少きにあらねど。もとより身軽に出立て。夜討な  
んどに習れたるものなれば門に入るにもまづくと。物  
音をいましめて。唯ふみしむる道の邊の草木のみ。絶て  
まけふきするものだに無ければ。やすくと忍び入りけ  
り。

忽ち起る喊の聲は第二の廊に響きて。まづ第一の廊に向  
ひ箭を放つと雨の如し。一の廊にても。かねて用意あり  
しにや。これも喊の聲を合せて。同じく射違ふる矢は。  
電光の如く。二の廊の門を開きて雙方まばらく射立ける  
が。まや面となりと。抜つれて。斬てかゝる。目さきも

知らぬ眞の闇。敵か味方か知るよしあらねど。秋泰は。  
すでに案内者がいひしを。少しも疑ふ心無ければ。一の  
廊の城兵を皆殺にして。然してのち本丸を乗取るべしと。  
踏込く戦ふほどに。忽ち數十人を討取りしかば。敵は  
大に辟易して。齊くばつと敗走して。追手の門より城外  
へどのがれ出たり。秋泰は馬を止め。城兵等はすでに逃  
出しぞ。今は本丸をのこすのみ。いでこの機を抜かさず。  
乗入らんと下知するほどに。俄に本丸より木戸をおし  
開き。打出たるその勢凡そ千餘人續松の光白晝の如く。  
一人の大將馬を乗出し。やをれ敵將は今川の家人朝比奈

某とやらん。うけ給はれ。我は當城のあるじ井伊介高願なり。かねて汝等が不意に攻め寄するよしをきくしかば。計略をもつて追手搦手兩手の兵を誘き入れ。汝等に同志撃ちさせしを知らざるか。汝等が今また射殺し。斬殺したるは。餘人に非ず。蒲原左近太郎が手のものにて。さきにあざむきて。一の廓に入れ置きしなり。疑しくは汝等が。手柄顔して。うち取たる首級をみよ。その笠印をみよ。いかに慌てたりとは言ながら。味方の首をとりて。誇り顔なる事のおかしさよといひければ。城兵等は一齊に咄と笑ひけり。秋泰大に驚き。いそぎ續松をとり寄せ

討取たる首級笠印をみるに。果して城將の言に違はねば。齒がみを爲して。大に怒り。我思慮淺くして。汝の偽の謀に陥りたるこそ悔しけれ。さもあらばあれ何ほどの事かあしん。我はすでに。二の廓まで討入たるは幸なり。此上は只一戦に。本丸を攻落さん。物どもたゆたふ事かはど罵り罵す程に。いまだその聲終らずして。忽後陣の方より崩れ立て。秋泰がうしろに頹れかゝる。こは如何と呼はれば。後陣の隊長喘くして走り來り。唯今退出したりと思ひしは。味方の兵にて城兵は。いつのほどにか一の廓に充滿て。後陣の方より攻よせたりといふほどに。

夜ははや白く明けたれば。驚きながらこれを見るに  
 果して。敵兵の背後よりせまれるなり。こはいかにと思  
 ふ間に。本丸の兵はすでにひたくと押しかかり。箭を  
 飛し。槍を揃へて突てかゝる。  
 秋泰前後に敵をうけて。さすが  
 の今川家に武勇拔群といはれた  
 る。古兵も爲す術を知らず。今  
 はしも是までなり。討死せんと馬をすこめ。我はすでに  
 籠中の鳥なり。逃れんとすれども逃る可らず。死ねや死  
 ねやと呼はりて。命限りと血戦すれども。一軍既に孤立

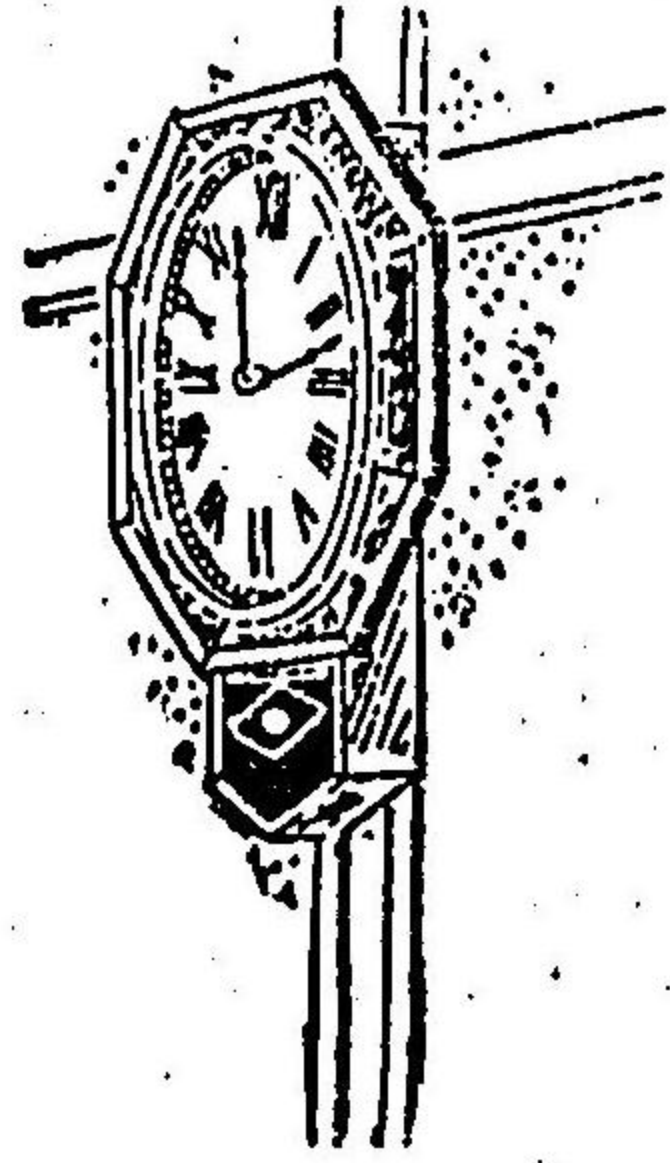


して。外に撥くる者も無れば。討るこもの數を知らず。  
 戦つかれて。倒るこもあり。甲を脱ぎ。敵の馬前に降服  
 するものも多かりければ。秋泰も箭創太刀創凡そ二十八  
 箇所馬も射られて。徒歩になりけるにぞ。秋泰今は力竭  
 きて。鎧を脱ぎ棄て。二の廊の石垣の下に坐し。腹を切  
 らんと志たりしを。城兵遙にこれを見て。すはや大將を  
 生捕れと群り集り。手とり足とり。秋泰に細をかけけり。  
 大將すでに此の如くなれば。士卒いかで稼うべき皆一同  
 に刀を捨て。降参まければ。戦こに果にけり。  
 さても淵原左近太郎範兼は。今川勢とわかれて。同じき



夜追手に向ひしに。これも又野武士に欺かれて。追手の忍び門より入りて。相圖を待ちけるに。俄に二の廊より箭を放ちしかば。すは城兵に悟られしかど。大に驚き。無二無三に戦ひしに。もとより不意を討つ可き計略なりければ。かく敵の爲に悟られては。反て背後より攻どるべし。空く城中にて討ち縮めらるべきにあらず。とて引返せと下知するにぞ。臆病氣付たる兵士ども。いかで一歩も止まる可き。我先にと逃出した。城兵はとや門の側に在り。のがれ出る敵兵を擇みうちうつ程に。續松は打消されて。黑白も分かず討つるもの半を過ぎ。範兼は。

からくして一方の血路を開き。馬を飛して。馳せ去りしかば。城兵は永追せず。やがて。城中へ引かへしけり。これさきに志るせしと同時の事なり。

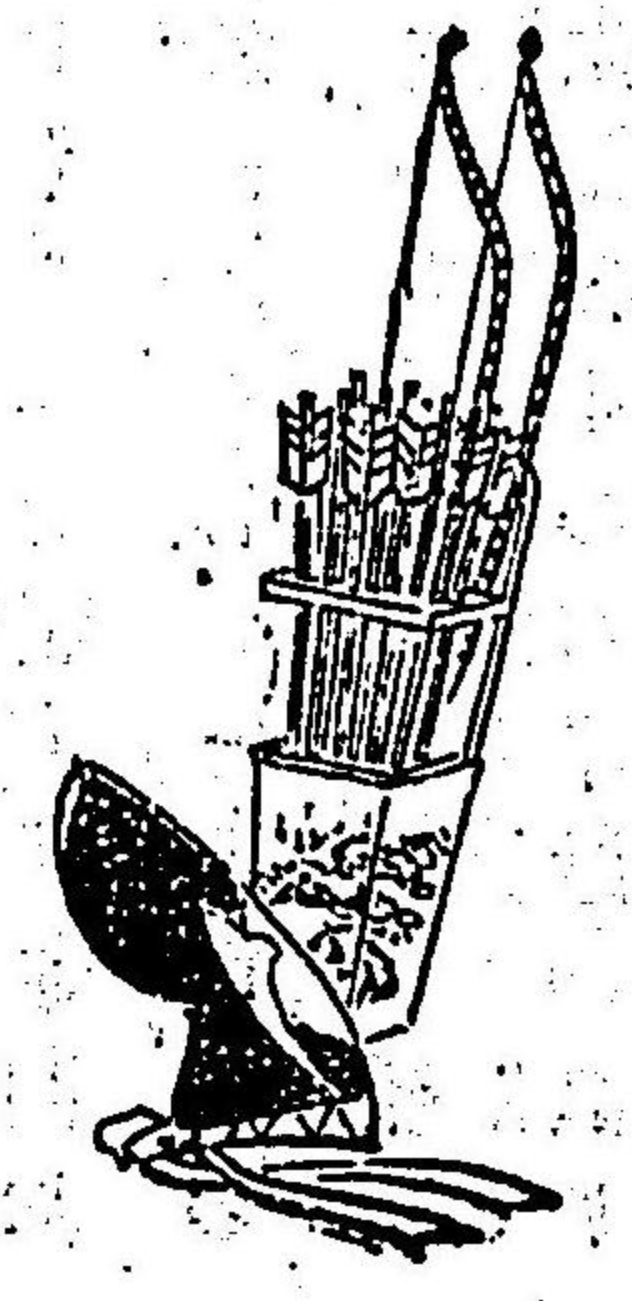


尊ぬるに。この防禦の謀は世良田左京亮政義が設けし所にして。尹良親王幼くましませども。よくその言に従がはせ給ひ。敵の夜襲の裏をかきたるなり。只一夜にして。さしも武勇に誇りたる今川勢を散く。にうち破り。蒲原左近太郎は。わずかに命をまぬかれて。のがれ去り。今川家の勇臣と聞

にたる。朝比奈十郎はもろくも。城中の捕子となりぬ。斯て。尹良親王は明る朝。政所に出まして。昨夜の戦功を御賞美あり。いづれも感状を下し給はる。その人々は。大橋修理亮定元。岡本左近將曹高家。山川民部丞重祐。恒川左京亮信矩。その外京家の侍にて先代の御時従ひ奉りし。堀田尾張守正重。平野主水正業忠。服部伊賀守守純。鈴木右京亮重致。眞野式部丞道資。光賀大膳亮爲長。河村相摸守秀清等なりき。これ等の人々は。此度の戦に。或は間諜となりて。敵中に入り。或は伏兵となりて。不意を襲ひ。寡をもて衆を破り。少をもて堅を挫ぎしもの

どもなり。敵將朝比奈十郎秋泰を生捕しが。これを誅戮すべきやまた免しかへす可きやの評議ありけるが。世良田政義を始め。大橋岡本山川恒川等は。はやくこれを斬りて軍門に梟け。敵の勢を挫き。味方の銳氣を勵まし。その機にのりて。引馬の城に押しよすべしといひ。堀田正重。平野業忠等は。これを捕へ置きて。他日我手の將卒敵の爲に捕られしとき。これと代るの便宜に従はるべしといふ。評議一決せず。しかるに。此よしを親王より母上なりける千代の御前に御物語ありけるに。千代の御前は。親王

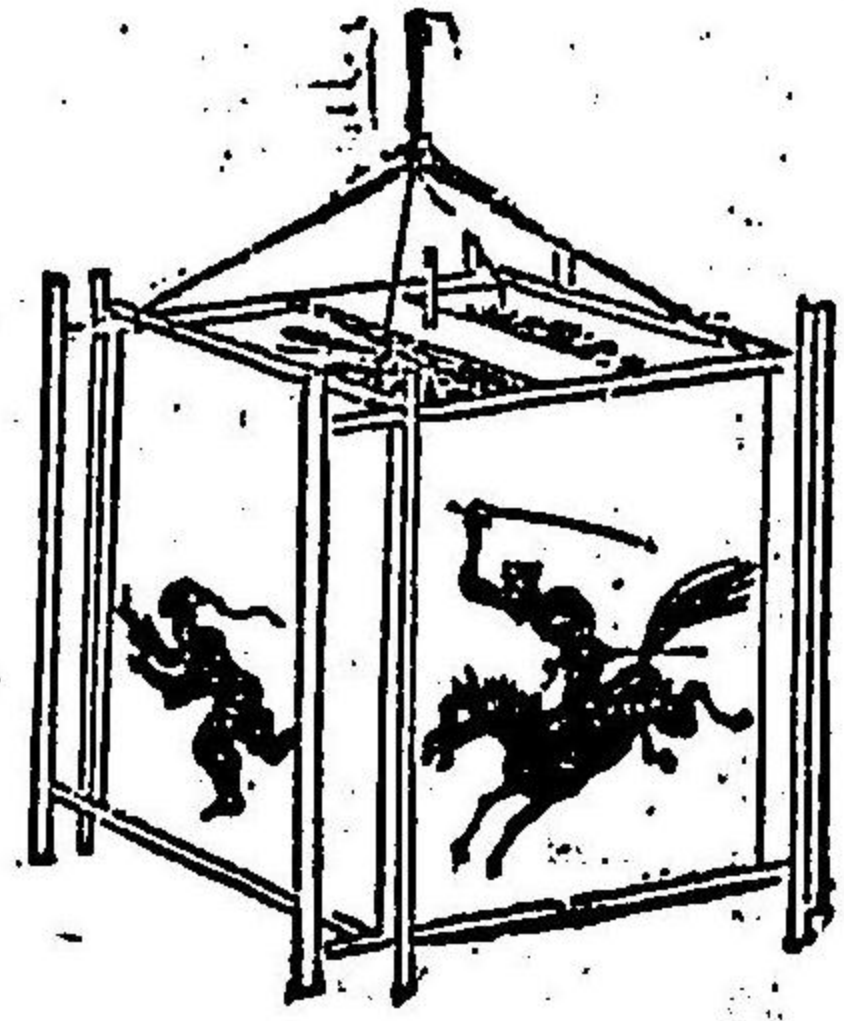
に向ひ。妾は女子の身なれば。斯る軍議をいろひ申へきにあらねど。故大王の御遺訓に殿下の御爲に。よきと知る事あらば。心限なく申候へとの御事なれば。申事にて侍るなる。そは。此頃みやこにては。北朝の帝より。吉野の行在所に御和睦の儀を請ひ申さるよしを承りぬ。そは御承引無きよしなれども。諸國の官軍大に衰へ。御軍も。はかくしからねば。あつから。御和睦の儀。これより端を開かるべきにやと思ひ侍るに。今川の頼み切たる



大將を生捕りて。これを誅戮せんには。和議の御障となりもやせん。此議を御思案あらまほしと對へ給ひければ。親王も胡大王の御遺訓とあるからには。婦人の仰なれどもそのまゝにすべうもあらずと。再び評議の席を開き。此事如何ある可きと問はせ給ひけるに。世良田政義は。此議は然るべからず。足利尊氏父子は。昔より變詐の謀多し。唯今尊氏の孫義滿の時に及べども。この志を改めずと承る。兩朝御和睦の義を執り申ども。いかなる變詐の計略に出ても計り難し。さるを。敵將をゆるし返しなば。彼はますます我を侮りて官軍の武威ますます衰

ふべし。暫くここに捕へ置きて。時を見計らはせ給ふに益す事あらじと申ければ。一同その理に服しけるにぞ。ゆるし返す事はとめさせ給ひけり。浦原左近太郎範兼は。井伊谷の敗北に數多の士卒を失ふのみならず。あまつさへ。今川遠江守を説きて。借り出したる一手の隊長朝比奈秋泰は捕子にせられしをみながら。迷れかへりしをもて。身の言譯を爲んすべ無く。使者を引馬城に遣はして。いつはりて。朝比奈秋泰は勇に誇りて。みだりに。敵の謀計を信とし。城中に深入りて。擒とせられぬ。範兼は追手に向ひてこれを知らず。反て

秋泰の爲に同志討の戦に及び。手のもの多く失ひて候。されど。一敗一勝は兵家の常なり。必ずこの敗をとりか



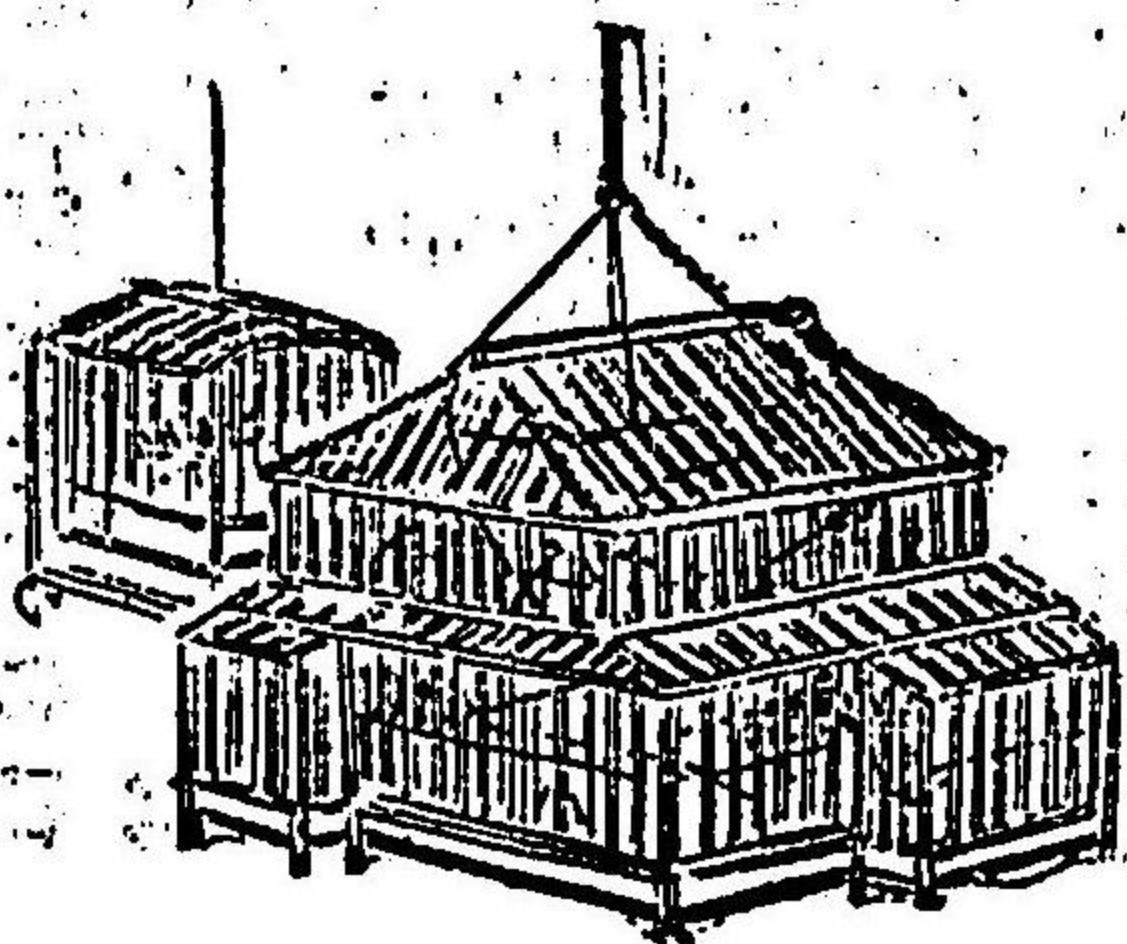
へす期もあるべし。御心になかけ給ひそといはせけり。遠江守貞秋は惚れはて。己が思案に能はざれば。戦河にあもむき。これを了俊に告げにけり。

今川伊豫守貞世入道了俊は。足利尊氏より三代の老臣にて。年積て七十餘歳武勇智略世の常ならぬ豪傑なれば。從子貞秋が注進を。かねてきよ。又今そのいふ所を委し

く尋ね。遠州よ。將軍宮は世を去らせ玉へども。舊好の  
武士少からず。いづれも數度戰場を歴たる。老兵なれば。  
蒲原範兼等が及ぶ所に非ず。我も所管のうち。宮方を  
置きまゐらするは。後目たき事なれども。今まで。その  
まゝに打捨置きしは。戦はずして衰へさせ玉ふを待ちた  
るなり。されば。我より戦を求むるは決して。謀の得た  
るものに非ず。とありければ貞秋は膝を進め。然らば如  
何してよからんといふに。了俊うち領き。その謀は箇様  
くどつまびらかに説きければ貞秋掌を拍て感服し。御  
父君の意見まことに善し。仰に従ひ。その如く取計らひ

候はんと。喜び受けて引馬にぞ歸りける。  
斯て五六日を経て。貞秋は使をもて。蒲原範兼を城に召  
きしに。範兼病と稱してこれを辭しければ。貞秋大に怒  
り。精兵一千餘人を遣はし。もし否といはし。板澤城を  
攻乾すべしと嚇しければ。範兼已むとを得ず。引馬城に  
出仕しけるを。城中にてこれを捕へ。一間に閉籠め。や  
がて使者に兵を授けて板澤につかはし。範兼御不審の義  
ありて。暫く引馬城に閉籠置るゝものなり。城はこの使  
者にあづけ候へど。嚴にいはせしかば。範兼の家の子等  
かねて主の刻暴をにくむゆへにや。異儀なく。了承しけ

るにぞ。今川の隊長一人入れ代りてこれを守りけり。さて貞秋は近臣岡部三十郎幸則といふものにて。あまたの米穀沙金を齎らし。伊井谷の城に至り。主にて候貞秋は叔父了俊が代官として。假に遠州を守るのみ。宮に對し奉りて。いさゝかも害心無し。しかるに。家人浦原範兼戦攻を貪りて虎威を犯し。あまつさへ。貞秋を欺きこしらへ。郎黨朝比奈秋泰をそとのかし。御在所に攻寄せしに。天罰のかれず。秋泰は御手に捕られ。又範兼



は遣ふくの體にて。逃れ來りぬ。貞秋大に怒り即ち範兼を召捕り。その知行を追出し訖ぬ。いかに貞秋が志を憐み玉ひ。和順の義を免許せられ。秋泰が罪をゆるして。還し玉はらは。何の幸かこれに若くもの候べきと。恐る言上したり。尹良親王はこれをきこし召し。使者をとめて。諸老臣を招き。評議ありしに。今川貞秋が申狀譎詐權謀に出たるに似たれども。すでに。範兼を戒め置き。和睦を求むると。あながち禮節を知らざるものと謂ふ可からず。たとへ。彼に詐謀ありとも。我に於て。油斷無くば。少し

も懼るゝに足ず。生捕てかへし。暫く無事を謀りなば。御使を吉野殿にまゐらせ。御旨を承はり。しかして。東西一度に合戦をいたすが。又は御和議に及ばせ玉ふかを定むべしとて。やがて暫く。合戦を停むべきよし。御返答あり。望の如く。秋泰を引出して。厚く勞はり。分捕の兵仗その外。秋泰とともに生捕り置きたる士卒三十餘人を使者にわたさせ玉ひけり。斯て又これ等の事の趣を吉野殿に申すべしと。その使者を選まるゝに。世良田左京亮政義自ら望み申ければ。さらばとて。陸路の往來は障多しとて。海路より。紀の路に向ふべしと定めて。

不日遠江を發したり。斯てのちより。今川貞秋は月毎に。使者を參らせ。又朝比奈秋泰等の郎黨に命し。土産の海産布絹沙金等多くまゐらすと。引もきらず。殊に宮の御母上たる千代の御前には。京よりして。錦綾の類目を駭かすほどの。巻物あまたしてまつり。その方様に仕へ奉る女房にも。物を贈ると敷を知らず。かゝりしかば。千代の御前の喜大方ならず。井伊介高顯も貞秋は敵ながらも禮節を重んじ。その主足利義滿には似ぬ仁義の大將なりと



て。使者を厚く待遇せられ又此方よりも。使者を引馬にあくりしに。その禮遇は井伊谷よりも彌増して。使者は面目を施しかへり來りしにぞ。城中の人々いづれも。宮の御運を聞かせ給ふは。近にあらん。今川だに御手に屬しなば。八州は戦はずして。宮に歸し奉り。征東將軍の御官位も名實ともに相稱ひて。めで度事限も有らじと。勇まざるもの無りけり。

斯りけれども。親王はいと心もと無く。兵法にも。將驕卒情るものは。必ず亡ぶるといふ事あり。世良田政義は智慮深く。唯合戦の勝敗のみにあらで。天下の時勢に明

かなるものなり。この頃の有様をみたらんには。彼何といふやらん。問はまほしと思へども。吉野殿にまゐりしより。道遠ければ。いまだ歸りこず。いかにすべきと。母千代御前に向はせ給ひ。今川貞秋が志は官軍に對し。忠節を盡すには似たれども。さりとして。明白に官軍與力の旗を擧るにもあらず。首鼠兩端を抱きし振舞縦跡尤も不審し。まかるに井伊介を始め諸老臣等心をゆるして。合戦の用意怠るは心得難し。母御はいかに思ひ給ふかと。申給へば千代御前は。きよも敢へず。君は御年若くましますゆゑに。徒力を出して敵を拉がんど。思ひ給ふのみ。



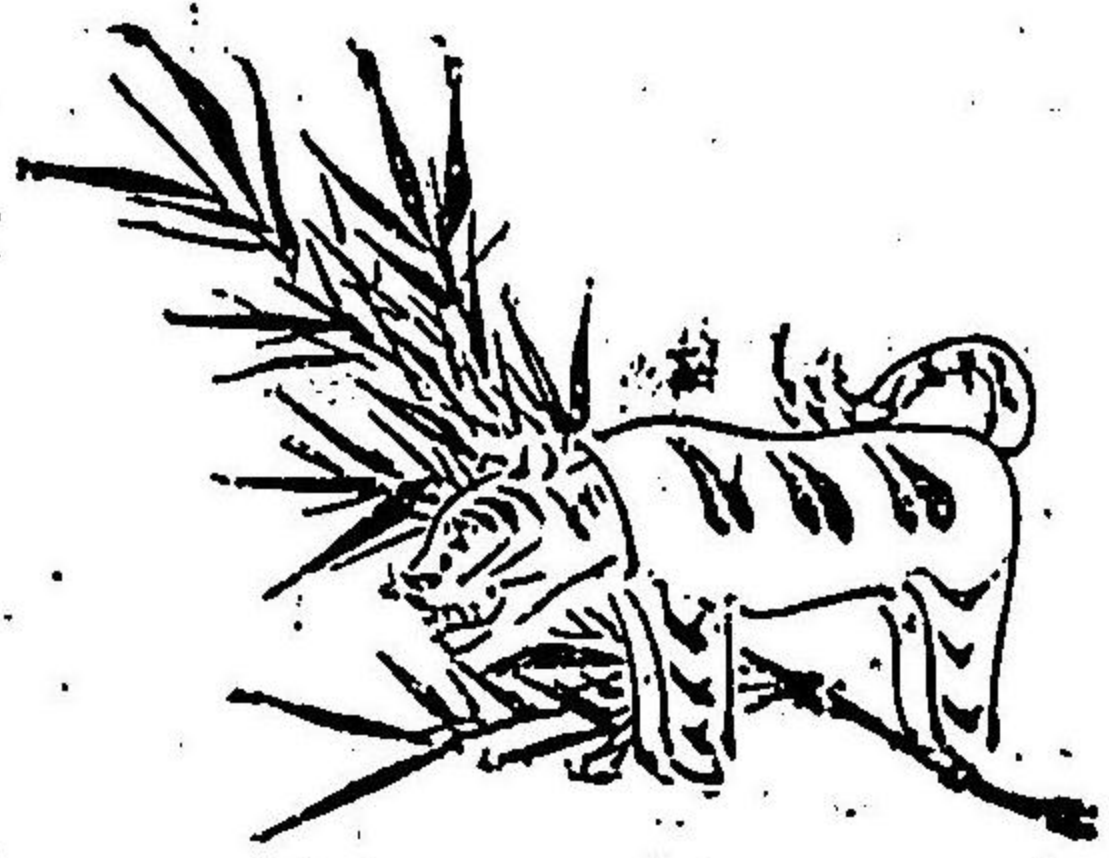
その心を服して。味方に靡き従がはせんことを。思ひ給はず。今川は家人とはいへども。足利家の一族なれば。かの家にては。一列の家人とせず。されば家督を争はんとする志ありと。官軍に心を寄せしむ。その下心あるなるべし。とにも斯くにも。戦はずして。降服せしは。御運の開かるべき前兆と思ひ侍るに。痛く疑はせ給ふものか。は。と答給ひしかば。親王も強て宣ひ給ふに及ばず。思はず月日を過ごしけり。



或る日。貞秋また使者をもて。申送りけるは。蒲原範兼が板澤の城は御領に隣りて候なるに。いぬる日。範兼御敵對候によりて。貞秋これを取り上げ。今は番城となりて候間。これを進上仕り。御味方の手始と伝るべし。いかで股肱の人々に御守らせ候べしとありければ。忠節尤も御感ありて。堀田正重。眞野業忠等の七頭に仰せて。これを守らせたる。されど今川の郎黨等も貞秋の命を受けて。第二の廊を守りければ。七頭も萬事その人々と謀り。城地につきたる貢税などは。専ら今川家の郎從に收納させ。七頭の武士等暇あり唯鷹狩酒宴に日を暮らし。

十一月の頃とはなりぬ。元中三年十一月廿七日今川遠江守貞秋俄に使者をもて。いよく官軍に属し。旗擧すべきよしを言上し。且つ井伊介高顯に面會して。申請べき仔細あれば。引馬の城に來臨を請ふといふ。親王は貞秋をばく使者をもて。物を献じ誠を致すと雖も。いまだ一度に當城に來りて。參謁を請ふと無し。高顯かるくしく赴く可らず。暫くその動靜を伺ひて志かるのち往く可と仰せしかど。千代前も高顯も。貞秋忠義の心疑ふべからず。志かるに。なほ遲疑して赴かざるときは。その歸順の心を失ふ可しとて。固く請申しておもむきけり。

廿七日の夜に至るまで。高顯かへり來らず。親王いかにくと待詫給ひて。小夜更るまで。いまだ腰所に入らせ給はず。折しも雨ふり出て。風さへ加はり。いと物凄き夜のさまなりしが。忽ち城中火を失ひしと。覺しく輝燉たる音耳に喧く人々慌て騒ぐと限り無し。親王驚かせ給ひ。御座近くあかれたる。御劔を提て立あがらせ給ふとき。喊の聲咄と起れり。すは城中に變事有りといふほどこそあれ。妻戸あらこかに。陷穽かして走來れ



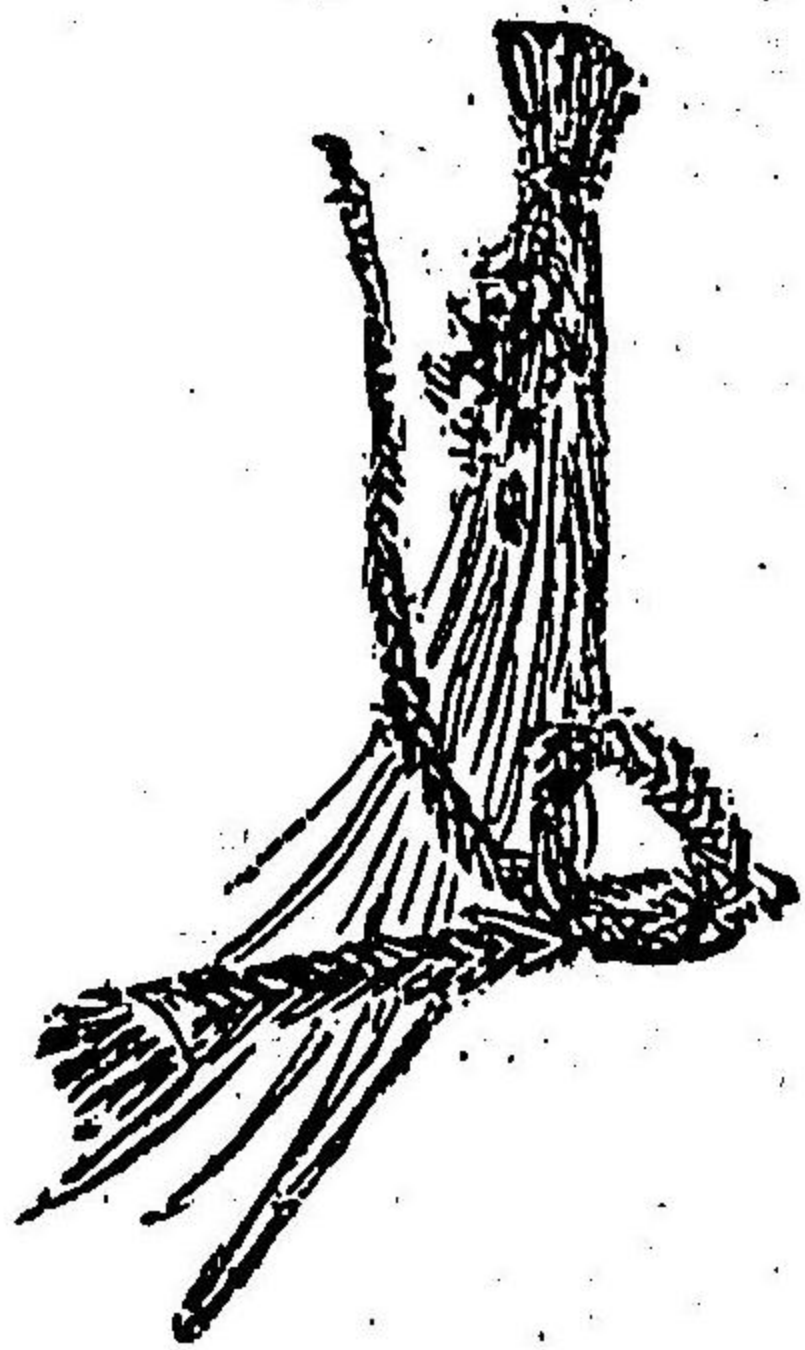
るものあり。我君これにましますか。大江田式部にて候  
多。御一大事こそ起りて候なれ。すは何事多。さん候今  
宵いつの間にもやらん。今川勢城をとり巻き。又城中は内  
應のものありて。火をかけたる勢に乗し。前後の門を内  
より開き。はやひたくと乗入て候。宿直の武士甲冑を  
着するに暇あらず。命限りに防戦仕て候へども敵は目に  
餘る大勢なり。味方は先の日板澤城にありむきしもの。  
半なれば。無勢なり。とても防戦かなひ難し。一先ここ  
を落させ給へど。息繼あへず申しけり。さては敵の爲に  
欺かれしこそ口惜しけれ。井伊介の安危心もど無し。そ

の仔細をききたるか。如何にも承て候。敵は口々に高  
顯は今日引馬の城中に討死し。板澤は此宵同時に夜討す  
と申しとなれば。いづれもく計略に乗たると覺て候。  
『斯く天運の盡きぬる上は。自害せん。』いな御自害は勿  
昧なし。敵いまだ寄せざるうちに。はやく御退去ある  
べし。『母上は。いかに敵の爲に欺かれしは妾の過なりと  
て。先刻御自害あり。君を守護し。いそぎ逃れ出て。再  
舉を運らす可きよし御遺言にて候。』母の死を見すてこ。  
いかで逃れ去るべき。こそ離せ自殺せんとあせらせ給ふ  
に。又一人襖を蹴開き世良田左京允にて候。先刻歸郷い

樹木陰鬱として。山樹重疊し。昨夜の雨は歇。朝日ほのかに差出たり。主従三人なほ篋笠にて。雲烟の間にまぎれ。その形を失へり。



たし。城に入らんとして。俄にこの變事に遭ひ候ひしかば。随従の家の子等と圍を破り唯今御座所に打入らんとする朝比奈十郎秋泰を唯一刀に斬りすてたり。かなたの穴門は敵いまだ知らず候へば。いそぎかしこより逃れ出づべし。雨は益々あらく。風は益々狂へり。火焰天に沖り。矢さけび。太刀音暗夜に聞えて。修羅岡場の光景いとあそろし。



辨 内 侍

先帝この吉野の深山に雲隠れ給ひしより。月日の過ぐる  
 といと早くて。はや七とせを經にけり。今の上いと幼く  
 おはしませしとき。御軍あまた引ぬさせ給ひ。陸奥の國  
 にあもむかせ給はむとて。遠江の灘にて。あらし波風起  
 り御船いと危ふかりしかど。八百萬の神たち夜のまもり  
 日のまもり。怠りなかりけん。つゝがなくもとの浦につ  
 き給ひしかば。そのしちは吉野のかり宮に立かへらせ給  
 ひ。父帝の御側をさらせ給はず。みかど神去りませしか

ば。ほども無くうへなき御位をつがせ給ひしが。近き國  
 は河内の楠の一黨。遠き東は新田北島などあまた靡き從  
 ひしには。然すかに荒ひをのみ旨として道志らぬ武士ど  
 も。王威にあそれやしけん。この四とせ。五とせかほ  
 とは戦などいふ事もなく。老らせ給ふ國くより貢の米  
 寶數多くたてまつりければ。深山の都も自らさみしから  
 す。恒例の節會。をりふしの御遊など形はかりなれと行  
 はれて。まばし御心を慰むるふしもありけり。  
 正平の二とせといふ彌生の頃。花はきのふけふを盛にて。  
 峯にも。尾にもさき亂れたれば。雲か雪かどなかめらる。

吉水院の皇居は去るとし修理させ給ひしかは。京の九重のきらくしきには似るべくもあらねども。さすがに萬乗の君のおましなれば。いやゝかに尊ぶとし。まして年古りたる松檜檜などの常盤木の間ことまごどに。櫻のうつりあひたるは。都にもまた無き風情なれば。この月の十日皇居の御園に廷道しかせ給ひ。幔幕うたせ。御座をまふけ。かり宮伺侯の公卿殿上人に仰ありて。花の宴せさせ給ふ。きのふの夕いふせかりし雲。けふは名残なく晴て。天は青みわたり。春風ぬるく。木々の梢そこはかと無く。霞をこめ。花はなほこりかに。かしこころに

咲まさり。君の御出ましを待顔なり。主上御座に就かせ給ひしかは。福恩寺關白前大臣季を始めに。洞院大納言世四條中納言隆中院前大納言久千種頭中將兼その餘左右の衛門督左右の近衛中將少將。地下の官人武家受領まで。いづれも綺羅を盡して候はる。御几帳を建られて。新待賢門院皇后中宮勾當の内侍典侍女嬪時に合ひたる。いろいろの衣ども。濃く薄く。幔幕の端にこぼれ出るもいと艶なり。



斯くて。管絃の御遊あるへしとて。關白所役の名を奏す。主上御覽ありて。内侍の辨はいかにしつる。和琴の上手これならでは。興なし。と仰らるれば洞院大納言辨はいたつき候よし。勾當の内侍をもて奏し候と申す。きのふまては。然もありとは見えさりつるに。斯るをりは。また得かたかるへし。とく召せと仰ありければ。實世長まりて。勾當内侍に仰言を傳へて召す。やゝありて。辨の内侍参りぬと申す。きらびやかにあらぬ。よそひなれど。六宮の粉黛無きか如しといひけんうるはし人なれば。花も恥らふへきさまなり。いかにしつる。いたつきありと

申せども。さも見えぬは。と仰ありければ。内侍いたくかしこまりて。夕邊の夢に。先帝の御側近く侍りて。舊都の花をみしに。昔に異なる事も侍らさりしかは。いと嬉しと思ひ侍りつるに。けふ花の宴せさせ給ふよしうけ給はりて。舊都の事風と思ひ出られしかは。頭痛く起りあかられ侍らすてかくなんど。あぢなく奏す。主上は御くしをかたふけ。まばし物も仰られず。在りあふ人々も御氣色いかにと。心地感しかば關白時もうつり侍らんに。内侍は。つとめて和琴の役仕まつり候へとありければ。かしこまりぬと申てむしろにつく。主上も御氣色やわら

かせ給ひて御遊はしまる。所役の人々いつれも。この遊  
に堪能なりければ。その音遠く濟みのほりてゆく。雲を  
も停めつへく。天津少女も降り來て。舞出つへくなん。  
思はれたる。けに主上の仰給ひし如  
く。内侍の和琴もなほ一きはすくれ  
て。誰もく。感しあへりき。  
管絃の御遊終りて。鶯花懷昔といふ  
題たまはりて。詩歌を上らせ給ふ。

志はしこそ雲とも見つれ山櫻  
御製



我宿とたのますなから吉野山  
さかりになれは句ふ春風

花になれぬる春もいくとせ

福恩寺關白左大臣師季

忘しな又出ぬとも吉野山

なれて幾とせ花の下かけ

なほこの日の詩歌ともあまたありけん。うるさければ。  
老るしとめず。披講終る頃。日もや斜なりしかは。  
主上まつ關白めして御杯を給はす。斯て公卿殿上人はさ  
らにもいはす。武士雑色にいたるまで。ほどくにつけ



て。三輪のうま酒。おほんめくみの至らぬくまもなければ。君よる津代と歌はぬものなし。御宴酌なりし頃。主上風と遙に見やらせ給ひ。武夫とも。いつれも。参候しつると覺ゆるに。河内守正行朝臣のみ。見えざるはいかに。かの朝臣は年なほ若く武勇の譽は父中將にも劣らぬものなるに。和漢の才にも乏しからず。殊に和歌も堪能なりとさきく。など。此むしろに参らざりけん。と仰ければ。實世卿かしこまりて。四條中納言をみやり給へば。隆資卿勅諭を傳へて候ひしに。治に居て。亂を忘すれざるは。武夫の職にて候。されは。御遊の當

日いかなる不測の禍あらずとも。いひかたければ。某は手のものをして。皇居の御固として。非常を戒むへきにて候と申て。麓のかたにまかり降りて候と申す。主上つらくきこしめし。敷感最淺からず。昔景行天皇禁中にて。群臣を集へて。酒給はせしとき。成務天皇いまだ皇子にあはしまししか。大臣武内宿禰ともに参らざりしか。は。勅問ありけるに。群臣御酒たまはりてあらんほどは。宿衛もども。戒めすばあるべからず。と勅答しけるにぞ。



天皇その用心を感じさせ給ひ。やがて皇子を。東宮の位にさせ給ひし。と日本紀に見えたり。まして今諸國に合戦なく。世はやゝ静なりとはいへども。北方の軍いかなる隙を伺ひて。寄來むも測りがたし。正行が思ひ謀りこそ。めでたけれ。誰か候。代りて。かしこを警衛し。河内守を召せと仰けり。補河内守正行朝臣は。君の召させ給ふよしうけ給はりて。すなはち警衛の出立のまゝに。萌黄威の鎧を着し同じ毛の兜は郎黨にもたせ。箆を掻負ひ重藤の弓を携へて。馬を御所の前に乗り放ちまづくと。御門に入らんとしけ

れば。衛士等はあしといめ。今日花の宴させ給ふに。武家の人々いづれも。官位相當の衣冠又は烏帽子直垂にて参候せり。甲冑のまゝにて。はいか。衣體を改られんと。然るへしといひければ。河内守は打笑ひ。正行はいにし歳より行宮警固の仰を蒙りて候へば。夙夜の祇候には。つねに。甲冑を帯して。非常を戒たり。まして。かゝる御遊には。武士の職務をいかておこたるへきとありければ。衛士等いと鼻しろみて見えたりける。正行は遙に御座に向ひて。拜し奉り。四條中納言して。参候のよしをまらす。主上これを御覽し。かゝる折にも甲冑を帯

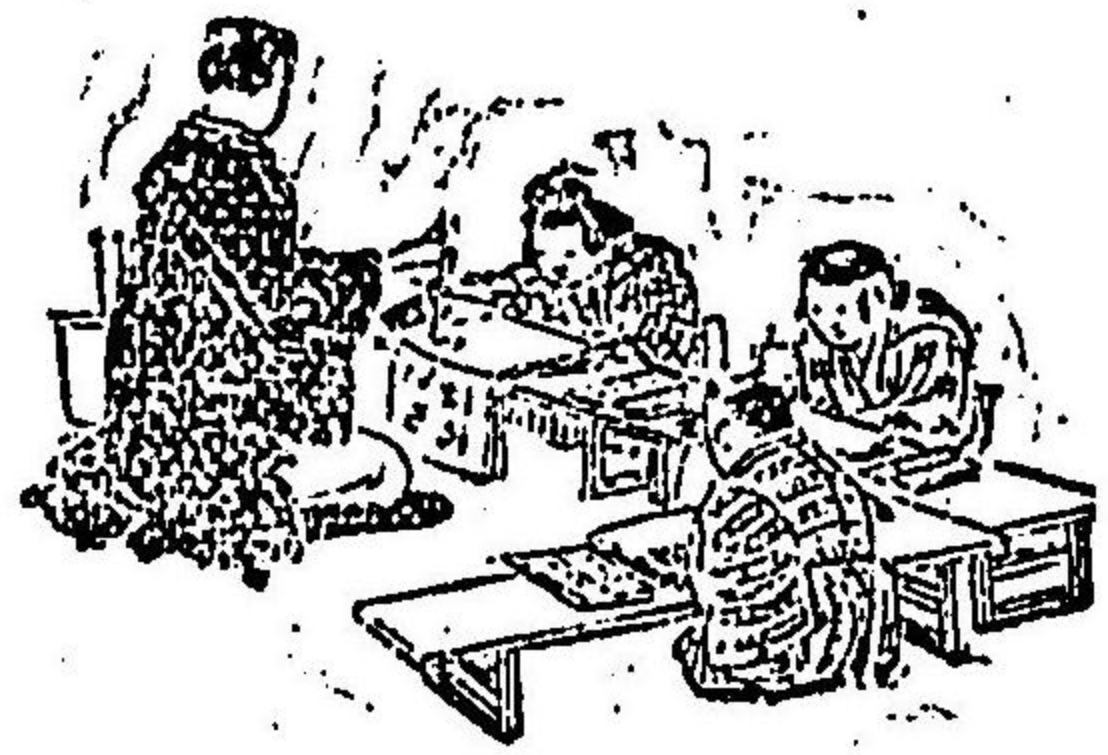
して。警固おこたらざるは。故中將の遺訓なるへし。近  
 う召せ。御盃を給ふへしと仰ありければ。陸資かくと傳  
 違あり。正行おそるくすむ。主上辨内侍を召し。ま  
 んちは。いまだ知らてやはある。あれぞ。故中將が長子  
 河内守正行朝臣なる。きんちが父。  
 右少辨俊基は。むかし山伏の姿にこ  
 しらへ。河内國にもむき。故中將  
 と。關東征伐の事をかたらしし事あり。文武のけちめは  
 あれども。いづれも先帝の御爲に。命を奉りし忠臣なり。  
 かゝる縁もあれば。きんちかれの酌に立てよとの給ふ。



内侍は。こしこまりて。瓶子をもちて。座を立ちて。正  
 行かほとりにあゆみよる。正行かくとうけ給はりて。心  
 ひそかに賤しき。武士の身をもて。いとも親しく綸言を  
 うけ給はる事のかしこさよ。右少辨俊基朝臣の事はしも。  
 父か折ふしの教訓にききにき。男子におはさす。女の子  
 のみと聞えしに。さては。この内侍はかの朝臣のわすれ  
 かたみにおはしつるかど。かしこければ。言に出しては  
 いはねども。懷舊の情に堪へかね。思はず首を擧げしか  
 は。内侍の面とさし向ひぬ。内侍はさと顔赤らめ。こな  
 たも。これぞかねて人傳にきにし多門丸とか聞えし人に

てありけるか。と思へは。何とやらん。胸とらるき。父  
 か此人の父とは睦しき中にてありつるか。さても違しき  
 若う人よと。唯一刹那の間に。萬感はやせまるかの思ひ  
 ありしかと。これも然りげなく。河内守御盃を給ふべし  
 と仰候ぞとて。盃を前に置く。正行はつゝしみて。盃を  
 捧げて。三度これを拜し。やがて。これを飲み終り鐙の  
 引合より懐紙をとり出して。これをつゝみおし戴きまか  
 り出んとす。主上はこれを見やらせ給ひ。やよまて正行。  
 次てながら。問はま欲しき事あり。近く進み候へと仰す。  
 正行謹みて。かゝる姿にて咫尺し奉るは。最長多しと申

す。四條中納言御氣色を伺ひ。いやとよ正行。御遊のむ  
 しろなれば。ゆるさせ給ふなり。とくくどありければ。  
 あと答へ申て。席をすゝむ。主上御み  
 づから仰せけるは。正行本國よりの消  
 息はありつるか。京都のこの頃は。い  
 かなる事やある。兎徒退治の事日夜に  
 思はぬにはあらねども。干戈の争ひに。  
 諸國の民州或は家を失ひ。財を失ひ。  
 妻子山野に流離ふか。いたましさは。  
 暫く月日をこゝに過しつるか。はや幾歲になりしかは。

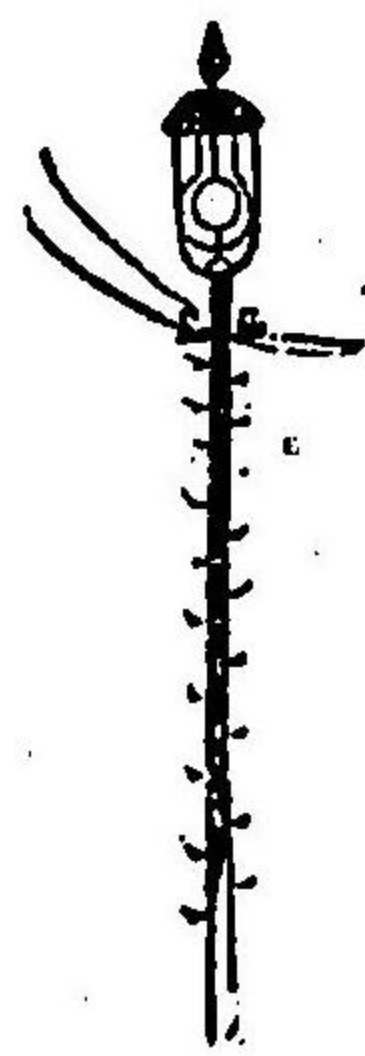


花見てくらす心も出来つる事のおぞましさよ。正行が思はん事もいと耻かし。さるにても。京師のさまいかにも思ふよしもあらはかたり候へど。いとも畏き勅諭を正行うけ給はり。かゝる御遊の折に申出るも。恐れ入て候へども。兇徒の謀はなほ老うねく。止みしども覺え候はず。されは尊氏か弟にて候直義兄か後見をして。よろづ謀ひて候ひしに。執事武藏守師直は。そを嫉み。いかて己が大功を著はし。その勢をもて。直義を追ひ退けはやと謀り。尊氏にすゝめ。この行宮を攻め落して。上を京都に遷幸なしまゐらせんとするよし。かねてかの地に忍はせ

置て候ひしもの。罷りかへりて申すよしの候。かゝれは決して。御油断あるまじきにて候。かゝる御遊のをりに。あどろくしき戦の事など。そうし奉らんは。いと興醒るわさにては候へども。禍は不測の時に生ずるよし。先臣正成がかねて教へ置て候間。勅問によりて答奉ると。憚る所もなく奏しける。關白を始め満座の公卿殿上人まで。げに正行か申す如く。ゆるかせならぬ御事なりと申ししかは。主上もうなつかせ給ひ。正行か申すと尤理あり。彼方の間諜等もかゝるをりを。みて忍ひ入らんも測られす。日も西山に傾むくと覺ゆそ。今日の宴もこれま

てなるへし。汝はなほ警固を怠りそ。いさ還らんと仰せ  
出されければ。關白仰を公卿殿上人等に傳え。主上まつ  
御座を立せ給ひければ門院を始め人々あがれゆき。御遊  
はこゝに果にけり。時に藏王堂の夕を告る鐘の聲花外に  
聞えて。はらく散る櫻はなほ。

今日の盛をのこしける。  
正行は御暇を賜はりて。御門を出



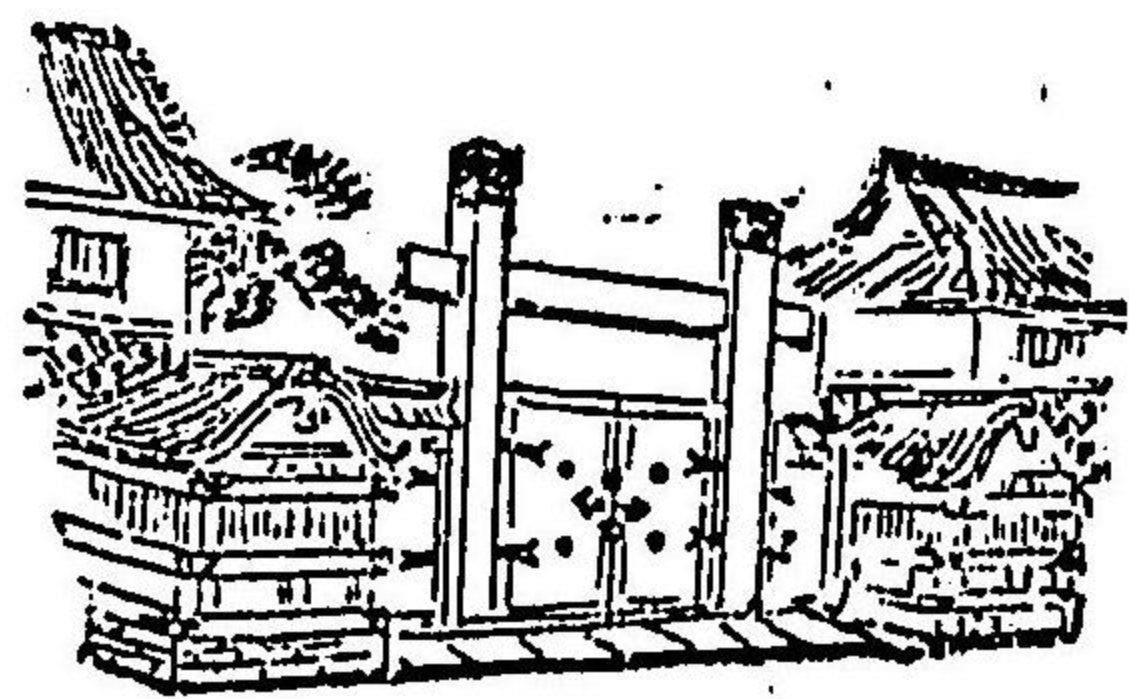
て。馬に打乗り。しづく。うたせたるに。心のうち  
に思ふよしやありけん。面色常ならず。しばくかなた  
を顧みて。と息衝く春の夕榮。天は晴るれど。心に一簇

の雲おこりしかゆくとも無く藏王堂を下りて金の鳥居の  
ほとりまで至りしに。あやしき女子の賤の女に似たれど  
も。衣の色都めきたるか市女笠深く着て。忍ひやかに歩  
み來りてか。正行か馬上に數多の兵士を従へて。向より  
來るをみて。俄に身を縮まして。路の片隅によるものあ  
り。正行はこれを見て。馬を止め。あの女子は何物ぞ。  
呼とよめてよしを問へど。兵士に命しければ。かしこま  
りぬと走りよりて。やよ女子。汝このあたりのものども  
見えぬに。いづこにゆくぞとひしかは。女子は打わな  
なき。怪しうあらぬものに侍り。これは辨のおもとに仕

へまつりし。仕女梅ヶ枝と申ものにて。久しく里に下り居しか。ぬしの伯母きみの。いたく痛せ給ふよしにて。その伯母君の御消息をたまはりて。只今御所の曹司にもむくにて候と答たり。正行は内侍の仕女とききて。何とやらん胸とろきて。しはらく首を傾けしか。さらは恠しきものにあらず。ゆるして指すかたに赴かせよといひければ。かの仕女は打よろこひいそしく走りて行過ぎけり。

河内守か陣營は。この吉野山の上り口の下の行場といふ所にあり。こゝは大峯入の行者か登山の時垢離をとりて。

身を潔むる所なりき。屈竟の要害にて。岩石峙ち木立茂りて。多の兵士を置くに宜しく。麓に向ひ矢頃よく。行宮警固の爲めにはこれに増したる城壘はなしとぞ。戦の事に習れたる武士どもは語りあへりし。さても正行朝臣は。花の宴ありしより二日目にや。ひとり陣營のうちなる。己か居間の文机に向ひて。書讀みておはしけるか。次の間より恩地八郎にて候。竊に申すへき事ありて。参りぬといふ。よし／＼こなたへと呼はせ給ひければ。進み

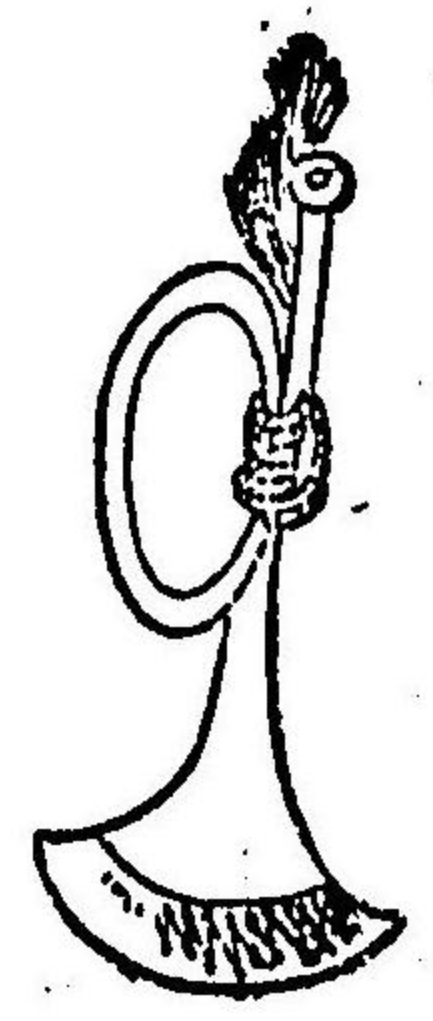


よりぬ。この八郎は補家譜代の郎黨にて。父は左近將監に任せられて。故中將に親しく召し仕はれしか。淺河の時。病ありて本國にあり。中將の遺訓を受けて正行どもに。河内の國を守しか。去るとし病みてみまかりぬ。されは八郎は父にも劣らぬ心さしまめやかなるものなれば。正行も二なきものに思して。つねに公私の事何くれと無く。隠らひ給ひしかは。きのふ意中の秘事を隈なく告て。いたしやりしか。只今かへり來れるなりけり。八郎は。正行に向ひ仰に從ひ。某か日頃往來しまゐらする御もどにまゐり。夫とは無くかの君の御ありさまを。

伺ひ奉るに父の右少辨世にいまそかりし時。はや二條少將にゆるされ給へりし由を。承はりて候ひき。されど。かの君は思ふよしやあはしましけむ。又はさる事も、おぼろけの事にやありけん。絶てこれまで。打出しての給ふ事も候はす。されど。少將どのは。をり節の御文などありて。花紅葉につけて。打かすめるも。御物思もいひあくらせ給ふとやらん。又はねもころに申させ給へとも。露の御答も無とも聞ゆ。斯く某に告げ給ふ君も。たしかなる事をは知らすと仰候と。聲ひそめて申す。正行つくくと打聞きて。先つとし世を去らせ給ひし母上の我か



爲に妻迎の事を仰つれども。その頃は余はいまた廿にた  
に至らす。妻子などあらんには。足手まどひなりとて。  
承引奉らさりしか。此頃いましを始め。老黨ども。妻定  
めせよと勸むれども。種姓よきは。



その人よしとも思はれす。よしと  
思もあれど。賤く育ちたるものは。  
先祖の家を汚すへしと思へは。好ましからて過ぎゆきし  
に。かの君は。その父我父と昔一方ならぬ縁あり。又常  
の淡々しき筋ならて。丈夫魂あるよしを。人のいひしか  
は。賊にやといふかしく思ひつるに。測すおとつ日。花

の宴にてあひみつるより。その人からの打あかりて。な  
つかしけなるに。花に浮れ。月に戯るゝ人とも見えす。  
世の愛き節をも語り慰め。もろともに。君の御爲に火水  
にも入なんものをと。思ひしゆゑにこそ。いと面正しく  
も無きとながら。汝に問はしつるなれ。されど。はやう  
より。さる人などの。心盡しゝものを。今は何とかすへ  
き。とにも斯にも。定まれる宿世なりしなるへし。唯思  
絶えなんのみと。ありしかは。八郎正景さも思さんは。  
理無きに候はねども。幼きときに。故辨殿の定めあかせ  
給ふとも。かの君のうけ引かせ給はすは。いかゞはせん。

御文などおくらせ給はし。自らその心さまを。知るよし候はんといひければ。正行は暫く目を閉ち打案しめたりしか。忽ちに容を正し。やあれ八郎。人にゆるせしとある女子に文を通はす事やはある。譬その心はいかにあるも。すてに。他人の妻にあらすや。そらに物をいふ事かは。と氣色いと悪しかりければ。八郎大にかしこみ。いそぎ退き出ぬ。

正行朝臣かいひつる如く。高武藏守師直左兵衛督直義と中わろくなりしか。我は將軍（尊氏）たに。容易く攻かね給ひし。南方を討ち平けて。大功を著はし。恩顧外様

の目を驚かしなは。求めすして。武家の權威は我手に落つし。さるにても。吉野殿の勢は先帝の御時に似るべくもあらぬと。さりどて。楠正行か一族數を盡して。守護し奉れは無謀の戦を爲すべくもあらす。間諜をもて。かの行宮のありさまを。伺ふこそよけれど日頃心腹とたのみたる郎黨驚坂兵内兵衛師宣といふものに語らひければ。師宣承りて。君にはかねて右少辨俊基朝臣の娘辨内侍を住吉詣のそりに。見初め給ひて。今にそを忘れさせ給はさるに



候はすや。師宣か手の者六郎二と申か。妹は辨のちもと  
 の仕女にて候ひしに。母の病に身の暇を乞ひて故里にか  
 へりて候。かれをそのかして内侍か伯母の病にこしら  
 へ。偽文を書して仕女に吉野の行宮にもむかしめ。其  
 従者に。心きゝたるものを仰せて。かの地のさまを伺は  
 せ。あはよくは。内侍をおひき出して。途中に武士を隠  
 し置き。都にゐてかへりなは。これ一舉兩得の策に候は  
 すやとありしかは。師直大に喜び。我かこたひの企は吉  
 野殿を攻落しかの主上をこゝに擒にし奉るのみには非ず。  
 辨の内侍を迎へとりて。かねての望を遂んとしつるなり。

さるをいまた合戦にも及はず。早くも欺きこしらへこゝ  
 にゐて来らんには。それにましたる謀あらんや。世に智  
 謀たくまじきものを楠などいへとも。汝はそれにも増し  
 ていと願母し。もし内侍をたに得たらんには。先陣にす  
 りみ。よき首得たらんより。遙にまさりし功名なり。よ  
 くせよかしとてゆるしければ。師宣は奸智に長けたる男  
 なれば。かしくまりぬと申て出にけり。  
 正行朝臣は内侍か事を思へとも。すてに人に約せしを今  
 更にすへきやう無く。心鬱々として嫉ます。大丈夫一婦  
 人の爲に心を勞する事やはある。新田中將は勾當の内侍

のなさけに潮れて軍機を誤り。大敵を討ち破る可き謀を  
いたつらに爲しためしあり。ましてや。この頃京師に  
て高の師直か。この吉野殿を攻撃はんとする結構あるに



かゝる女々しき事にかゝつらひて。  
軍事に情るとあらは。上は先帝の神  
慮も恐多く。下は父尊靈にも。何の  
面目あるへき。我過てりくど。思  
ひかへし給ひしかど。夜静人定ると  
きは。あやにくに。風と胸に浮むは内侍の事なり。か  
の花の宴の時。何とやらん此方を見おこせたる眉。唯な

らす見えたるは。心無てやはあらん。酌に立たるに。手  
のふるひたるやうは。心に思ふ事ありしなるへしなど。  
その時のさま。なほ目の前に在る心地する。怪かる事か  
な。我なからあないみくしと思ひかへし。さまくの  
事に推し移りしか。又風どかの梅枝とやらんいふ仕女か  
何事やらん内侍の妹母のがりより。病のよしを告げ越し  
たりといひしか。その顔色の常ならさりしかど。推し問  
ふ可きにもあらねは。そのまゝ打置しか。今また思へは  
いふかしき事無に非ず。敵にはこの行在所を伺ふよし。  
かねて間諜にて知りたるに。女なりとて。ゆるかせにす

へからず。よしを問はしやとて。竊に例の恩池八郎に命  
 し。手の者を近き村々につかはして。伺かはせ給ひけり。  
 斯くてそ。少し物思ひも打まきれ給ひける。  
 きふの雨に花はやうやく散初しか。けふは又午過る頃  
 より山風さと吹出て。木末を鳴らし。おとろくしく。  
 花は吹雪と散りぬ。あなあさましと。惜めどもかひ無し。  
 かゝる所に行宮の築地のうしろより。一丁の手興身き出  
 てたり。雑色二人はかりと。帷子深くかつきたる下仕の  
 女子にやあらん。従ひゆきけり。興の縫隙より漏出る袖  
 口など色あひ麗はしければ。宮の内内侍などか。かり

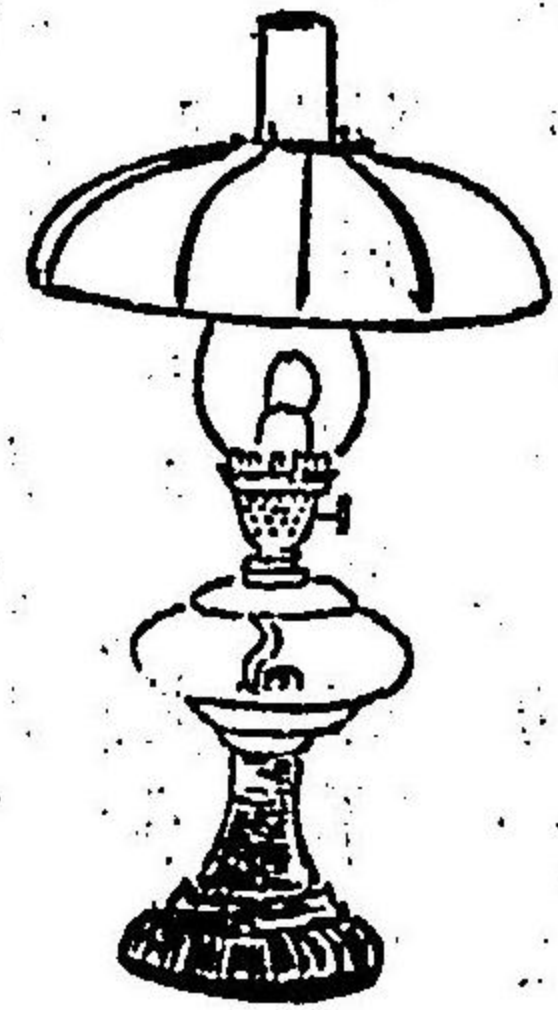
そめに。物詣し給ふにやと。道ゆく人  
 も見かへりけり。なほこのゆくてに散  
 る花も。然すかに徂く春を惜しみ顔に  
 興の屋に。一片二片つきたるも。いと  
 艶なり。  
 さても八郎正景は。手のものに仰せて。  
 京都の間諜を。こゝかしと探らせしに。  
 果して。吉野川の渡より一里はかりの  
 あなた。六田といふ里に。いつこより  
 來れりとも。得知れぬ武士四五人隠れ



居るよし告るものあり。すは搦めどれとて。兵士あまた  
やりて。尋ね求めけれども。いつ地ににけゆきけん。行  
衛を知らず。此よしを正行朝臣に告げ申けるは。かの女  
興の宮の内を出てし日の申の頃なりけり。正行はきいて。  
こは安からぬ事なり。その手興につきしは。はつかの雜  
色を。梅枝とかいふ仕女にそあらん。こやつ。恠しきや  
つなり。我どもかくもゆきて。その様をみむ。はや時移  
りしとはいへども。追かけむと。當直の侍五六騎と馬を  
馳て追ゆきしに。吉野川を渡らんとして。舟を呼ひしか  
と。舟人は在らず。こゝは要害の爲にたやすく。舟を出

さゝるは此頃のおきてなりければ。とかくして。舟人を  
召してわたる。女興はいかにといふに。先ほどわたり候  
ひきといふ。さらはとて。いそぎ向ひの岸につきて。な  
ほ馬を馳するほどに二三町も來ぬる頃遙に。あなたの方  
より。喘く走りくるものありけり。とみれば。女興に  
つきたる雜色にて。小鬘のはつれに。創負ひ。烏帽子を  
打落され大童になりしものなり。先駈のまへに走りつき  
て。これは辨内侍の御供して。高安までとてつき奉りし  
ものなり。六田の方まで。ゆきしに。いかめしき武士五六  
人いて逢ひて。伯母きみの高安におはしましに。病重

り給ひければ。住吉まで罷にこそ。もしまゐらせ給はし。  
 道にてそのよし申せとの事なりといふ。いと心得ぬ事に  
 こそ。住吉までいかて行なん。こしをかへせと。内侍の  
 仰候ひつるを唯住吉まで急ぎ給へど。  
 引立した。某等これをさへしかど。  
 かの武士は。やにはに二人をきり殺  
 しぬ。某は命惜しとは存せされども。  
 このよし申さんとて走りかへりて候といふ。正行きゝて  
 さてはどはかり。かの雑色をみかへりもせず。者共いそ  
 げといふまゝに。馬に鞭して飛が如くに。六田の里の入



口まで来て見れば。武士等は。はや。手輿を荷ひて山立  
 んとす。輿のうちは。ひそやかに泣給ふ聲すなり。正行  
 は少しもためらはす。馬上に弓取直し。忽ちよつ引て放  
 つ矢に。頭立たるものゝ頭の邊にてうと立ち。あど叫ひ  
 て倒れたり。のこる武士は。大に驚き。輿かきあろし。  
 一同に抜つれてきつてかゝる。正行の郎黨は。はやくも。  
 馬を飛り前後より打てかゝり持たる刀をうち落し。踏  
 にぢりて四人をかちめどり。その一人を斬てすてけり。  
 頭と覺しきものは。正行の一矢にてもろくも。命を落し  
 ければ。郎黨その首をきりて。太刀の先に貫き。さてこ

のあたりものを呼び出して。生捕の繩をとらせ。死人のむくろなどをあさめさす。正行は馬より徐に下りて。輿のほとりに近き恭しく禮を施し思ひもよらぬ枉つみにさこそは。驚かせ給ふめれ。仇はのこらす掬めどり。又は討取りぬ。今は御心やすかるへし。伯母君の御いたつきは。賊しからぬ事なり。梅かえとかいふ女子は。戦の隨にいつ地にか。逃失ぬ。されば。このまゝ吉野にかへり給ふや。また高安までおはすへきやと。ねもごろに尋ねれば。内侍は涙をおさへ。妾の心あさなくて。よからぬ女子に欺かれし事の恥しさよ。御身の助なからましか

ば。いかなる辱みむも測りかたし。の給ふとく。伯母の病とは。いつわりなると疑ふ可らす。いと憚あることなから。いそぎ。吉野にかへさせ給へとありければ。正行さらはとて。郎等に下知し所の民に内侍の輿をかゝせ。すてに。日暮しかは。續松をともさして。引還すほどに。逃れちりたる。輿丁等も。こゝに打集ひ。民に代りてかきゆくめり。正行はまた馬にのり。郎黨等に内侍の輿をうち守らし。しつゝ吉野をさしゆくほどに。さすか浮世の道理に忍ひにし心も。再ひうち亂て。その面





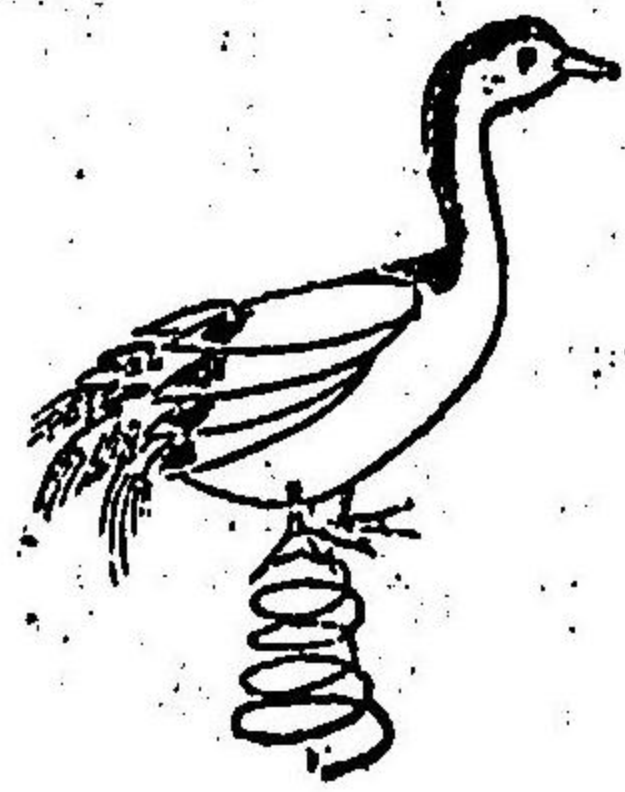
影をみるにつけ。何とやらん胸苦しく。轡をる手も。打  
ゆらき。思はず少しおくれしを。一鞭加えて續松の光を  
慕ふて急きけり。

内侍はこの夜つゝかなく。行宮にかへり。明る日かくと  
奏しければ。主上は聞し召して。打驚かせ給ひしか。正  
行かへたらきを痛く喜はせ給ひて。急き召して問ひ給ひ  
ければ。正行かのくせるのは。師直が腹心の侍にて驚坂  
平内兵衛と申ものなり。正行これを射殺し候へども。そ  
の手のものは。多く生捕りきひしく糺問し候ひしに。師  
直か不日この山に改寄すへき爲めに遣はしたる間諜のよ

し。白状して候。かゝれば。彼より打て出でさるに先た  
ちて。軍勢を催して。雌雄を決すへきにて候と。委細奏  
聞しつるにそ。主上厚くその志を感じさせ給ひぬ。

斯くて。或る日。主上常のまましにて。辨内侍をめし。  
いかに辨。きんちか。父右少辨か。きんちを。二條少將  
爲教にゆるせしよしを。きつるか。賊かどの給ふに。  
内侍かしまりて。親しくさるよしを承り侍らす。この  
頃爲教の消息にてき侍れど。たしかに有りとしも申す  
ものなくと奏す。さらば。正行はいまたよすか求めすと  
きく。きんちを賜せんと思ふは如何と仰ければ。内侍は。

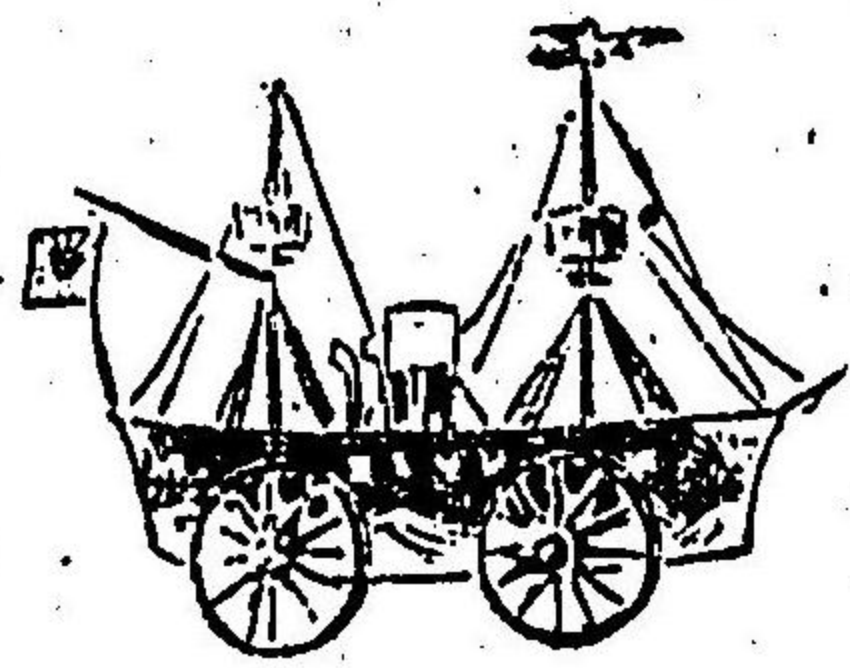
思はず。面をさど赤め。はかくしく。御いらへ申さず。  
 かゝる事は。容易くいひ出つづくもあらぬは。なほよく  
 思ひてみよと。仰ありて。入らせ給ひぬ。  
 内侍は曹司に下りて。その夜は更たく  
 るまで。燈のもどに。つくくど。越  
 し方。行末を思ふに二條少將は亡き父  
 のゆるし給ひしとて。去る日も。いと  
 ぬもころに消息しつれども。誠にやいぶかし。よし然あ  
 りども。かの人。世の好ものにて。浮きたる性と大きく  
 ものを。いかて。身をうち任すへき。河内守ぬしは。亡



父みろの父中將とは一方ならぬ睦みあるよしなるに。去  
 る日測らすも。身の禍を立どころに掃はせ給ひし恩人な  
 り。もしその人に救はれすは。如何なる愛目とみて。亡  
 父はさらなり。君の御名をも汚すへかりしを。まして。  
 忠孝兩なから全く。その家の子等にも。恵あつきよし。  
 かねてきつれば。唯此人によすか求めむには。生れ出  
 しかひこそあれ。聞さるにても。かの人はいかに思ひ給ふ  
 らん。帝の仰重しども。心にしまぬ縁をば結はぬ例しも  
 ありとし聞けは。なましひに。我賢く御受申して。いな  
 まれなは。如何はせん。愚なる身をいかでとて。答へ奉

らんかど。さま／＼に思ひ亂しかは。その夜は枕につき  
しかど。明る朝まで露まどろまれます。  
正行は。師直か間諜を得て。敵の計略隈無く知りてけれ  
は。いそぎ使を本國に遣りて。弟正儀を留めて。赤坂の  
城を固く守らせ。父の時より戦に習れたる兵どもを多く  
招きよせ。我より打て出る用意にいとま無く數日を明し  
くらしけり。かゝる所に或日陣門を守る兵士來りて。唯  
今内勅使として。四條中納言隆資卿あはしけりと告ぐ。  
正行恠みて。此度の軍議はすてに先の日奏聞しければ。  
別にうけ給はるへき勅諭ありとしも覺えず。もしいさ／＼

かの事ならんには。中納言のみつから來給ふへうもあら  
ずと思へども。打置くへきならねは。出居の間に請して。  
己は烏帽子水干に改めて對面す。中納言  
は。坐に座きて。軍旅の勞を慰め。さて  
今日まゐりしは。内々の仰を傳へ申さん  
爲なり。ろは。外の事に非す。御身は。  
いまた定まれる。妻もあらずときく。右  
少辨俊基の娘の内侍は。御身もかねてし  
らるゝのみかは。去る日危き難を救ひ給ひし縁もあり。  
そを賜はせんは。いかにどの仰あり。昔源三位頼政に直



蒲といひし宮女を賜ひし例もあれは。辭ひ給ふまじき事  
 なるべしと。いとねもころにいひけるにぞ。正行は思ひ  
 もかけぬ君の仰に。しはし胸塞りて。手をつかへたるま  
 まに物言はず。やゝありて。不肖の身を斯くまでの恩命。  
 いと辱なく侍れども。かの内侍は殿上入のうちに。亡父  
 のゆるせしものありと承るを。いかにして斯る仰のあり  
 しにやと。いぶかれは。いや。そはもとより慥なる  
 事も無く。内侍も親くきし事無しとぞ。又何人にてあ  
 りけん。言寄る人もありと聞えしかと。返り言さへ聞え  
 すといへは。何の憚かおはず可きとありければ。正行は

打案し婚姻は一世の大事なり。勅命かしこくはあれと。  
 とみには。勅答申かたし。なほこれより申へきにて候と。  
 いひしかは。隆資卿も。げにそもまた事わりあり。さら  
 は罷りてこそとて。かへり給ひけり。  
 御心ありて。君のかく仰給ひしか。計らすも。符合せし  
 にや。嬉しくもまた胸塞り。いと苦し。我喜に引かへて。  
 二條少將か心のほども哀れなり。内侍の心はいかに。父  
 の俊基朝臣は。長袖には似け無く。先帝の密詔をうけて。  
 萬死を冒して。大事を企て事ならずして。露と消えしま  
 すらをなり。内侍もその心をうけ繼ぐならは。我心と同

しく女々しき色戀に溺れて。父かゆるせし人をすてし。  
 他人にやは従ふへき。とを知りつゝも。君の仰に従ひし  
 は。武夫の心を慰め給はんと。深き  
 慮を畏こみて。已とを得ず受け奉り  
 しか。斯くまで厚き君の恵をいなみ奉  
 るはいとも畏こじ。さりどて。はや我  
 小勢をもて。敵の大軍に蒐け向ふへき  
 時も近し。萬死に一生を得かたらん。  
 なましいに。人の怨みをかへりみす。事受けして。縁を  
 結ひなば。末途げましきのみならず。恥かゝやしき名を



や流さんど。然すか大丈夫の豪傑も千々に心を碎きし末  
 に斯くそ勅答しける。  
 どても世になからふへくもあらぬ身の  
 假の契をいかてむすはん  
 幾程もなく。四條畷の夕嵐に紅葉ととも散り給ひぬ。  
 内侍のゆく末はしるしものなけれは。しる人もなし。



明治三十年三月二十日印刷  
明治三十年三月廿



小御門  
定價金八錢



編輯者 兼

大橋新太郎

東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

愛敬利世

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所

株式會社 秀英舍工場

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

明治三十年三月二十日印刷  
明治三十年三月廿八日發行

小御門

定價金八錢

版權

所有

編輯者兼

大橋新太郎

東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

愛敬利世

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所

株式會社 秀英舍工場

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

須藤南翠君著

江戸自慢 男 一 疋

全壹冊洋裝  
正價金拾錢  
郵税 一錢

# 袖珍小說第八編

元和偃武以降、大江戸は武士の淵藪となり、其豪邁不羈の氣象は、自ら市井に移りて俗を成し、竟に江戸ッ子なるものを造る、本人情風俗の他國に異なりて、豪俠の氣質を帶るものありと雖、亦武士志操の感化養成したるもの、與つて大いなる力ありと謂ふべし。南翠君こゝに感ずる所あり、其銳利骨を刺すの筆を驅て、此男一疋を寫し、飾るに豊艶華麗の文を以てす、作品既に奇、字句亦妙、此著の佳なる敢て贅言を要せず。『眼に青葉山杜鵬初松魚』、雄渾洒脫、磨き來る俠骨を知らんと欲せば、請ふ一本を購ふて、眞の男兒を味はれよ。

# 袖珍小説

每月參回發行

正價

●壹册金八錢 ●六册前金  
●四拾五錢 ●拾二册前金八  
拾錢 ●郵稅一册二付二錢

小説の出版日に月に盛んに、我邦文運の隆昌、古來未だ曾て今日の如きはあらず。本館偶々感ずる所あり、茲に袖珍小説を出版す。本是れ一世の名流巨匠の筆に成り、所謂金聲にして玉振なるもの、其想は俊邁奇拔、其文は麗麗雄大、實に文界の偉觀たるに背かず。表裝亦美術大家の新意匠に成りて、明窓淨几の下、紳士淑女の好伴たるべく、船に車に、山に伴ひ水に伴ひ、旅憲革裏の珍たるべく、又時に世相を觀下、文章を習ふ徒をして、精讀沈思藉て以て餘師あらしむ。江湖諸君請ふ極愛讀あらんことを。

● 第壹編 つりの 饗庭篁村翁作

つりのは葦村翁が得意の作なり、滑稽百出讀者必ず抱腹せむ、戯文紀行亦其餘技文想脱俗

● 第貳編 間一髪 森田思軒君譯

同一髪は實に題目の如く生死刹那讀者手に汗を握る者、附録として冒險譚一則を添へり

● 第參編 僥倖 幸田露伴君作

僥倖は金が仇の世の中を寫せるもの奇想天外より落つ其他紀行あり雜錄あり各一種の有妙

● 第四編 彫像師 内田不知庵君譯

彫像師は泰西名家の作を不知庵君の譯せるなり譯文明晰一字一句苟もせず實に近來の名作

● 第五編 忠孝 三人武士 福地櫻痴翁作

三人武士は櫻痴翁得意の好題目勇者の面目躍如たり其文其想淡中美味あり妙云ふべからず

● 第六編 天製絲瓜の水 幸堂得知君作

天製絲瓜の水は幸堂翁が作中の傑物也能く天上界の光景を寫して妙想神を奪ふ附録亦可歸

● 第七編 小御門 依田學海翁作

小御門に添ふるに尹其親王と辨内侍の二篇を以てす翁眉雪能く南朝を説く就中此是好文字



# 袖珍小説第五編

福地櫻痴君作

忠孝三人武士

全壹冊洋裝  
正價金八錢  
郵税四錢

櫻痴居士の作、鎌倉管領持氏已に亡び、二孤亦誅せられ、永壽王僅かに免れて遂に立つに至れる迄の事蹟に據り、小河常陸介、神崎右近の忠と、小宮山太郎の孝とを寫せる一篇の袖珍小説なり。坊間に行る小説は、大抵愛戀小説にして、愛戀にあらざれば、資て以て小説の材料と爲すに足らざるかの如くに心得たる今日、居士の材料を茲に採りたるは、其の着眼の高きを知る可し。殊に其文を行るや、彼の近代の作家が舊套なりとして避け、生嚼りの讀者が、陳腐なりとして排斥する所の、七五調を交へ、臺辭を混じたるも、一見識ありと云べく、而も縦横無盡に書き廻して、伏線あり、照應あり、色あり、香あるは有繋に志練の筆なり。之を他の作者の小説に比するに、落想に於て己に群に描んで、行文に於て又衆を壓し、優に其上位を占むるものと謂ふ可く、忠孝の大道、頽れんとするの今日、大に人意を強ふせしむるに足る。余輩は此種の作を歓迎するものなり。

(信濃毎日新聞評)

五

四

● 第八編 江戸自慢 男一疋 須藤南翠君作

男一疋は南翠君の尤も經營慘澹の作なり篇中の人物悉く活動して些の遺憾なし作中推壓卷

● 第九編 あま蛙 齋藤緑雨君作

あま蛙は緑雨君長所の皮肉文字添ふるに初學小説心得と小説評註とを以てす其文寸鐵殺人

● 第十編 密告 塚原澁柿園君作

密告は澁柿園の作なり添ふるに號外附録なる小説を以て寸文に奇骨あり其想亦頗る脱俗す

● 第十壹編 腕ためし 山田美妙齋君作

腕ためし、しどみうり、無名姫、古根の四篇合せて一篇を成す長短疎密各種の妙あり奇絶

● 第十貳編 杜鵑一聲 遲塚麗水君作

杜鵑一聲に添ふるに織財布を以てす附録の上毛の三山なる一文は麗水君得意の文章兩々可觀

● 第十參編以下の目次は追次廣告すべし

依田學海先生著

譚海

全四冊 木版日本紙刷和裝  
正價金七拾錢 郵稅拾二錢

全三冊 活版縮刷洋裝假綴  
正價壹冊拾錢 郵稅四錢

依田學海先生、嘗て云ふ、名君、賢相、智將、勇士の事蹟は、正史紀傳に載せて、其才德、功業を天下後世に傳ふべし、唯彼の奇人逸士、若しくは巧藝技術の士、又は俠客妓女にして、貞操節義ある者、劇盜騙詐の無賴者等、其事世の教訓に爲すに足らず、雖も一節一義の採るべきものあり、懲戒に爲すべきものあり、此等の類は正史紀傳に載すべき限りに非ざるを以て、其事蹟湮滅して、後世に傳はらざるもの多し。是に於て、先生此編を著し、忠臣孝子はさらなり、俳歌者流は芭蕉、其角の徒、神史者流馬琴、京傳、種彦、一九の輩、又は妓にして奇行ある瀬川、小柳、首信の類、主僕にして變を報したる、金井仙太郎、或は劇盜にして名を轟したる國定忠次、奇癖を以て世に聞へたる蛇喰翁、其他駭くべき、喜ぶべき、奇人偉士等數十人を聚め、得意の妙文を以て、其傳を作られたれば、其文章の奇裁妙絶なる、恰も数千駒の演劇を一場の中に視るが如し、

依田學海先生著

話園

全壹冊 洋裝美本  
正價金拾五錢  
郵稅四錢

依田學海先生著

英武蒙求

全壹冊 洋裝  
正價金拾錢  
郵稅四錢

●日本新聞評 是は依田學海翁の筆に成れり、英武蒙求の既に學海氏とふさはし、少年には成るべくかゝる者を讀ましたし

●東京朝日新聞評 是は學海翁が李滯の蒙求に倣ひ國史忠臣孝子義士烈婦の事蹟を蒐めたるものにて少年者之を讀み以志氣を練り徳性を養ふべく乃ち其良友好侶と爲すに足る

●世界之日本評 本書は古今の英豪傑人の英武なる言行を平易に記述せるもの兒童最好の良友なり

●扶桑新聞評 依田學海翁の著にして少年の智勇を勵ます、將英士の歴史話なり

# 俠客傳全集

## 本書目次

幡隨院長兵衛一代記

天魔水滸傳

鼠小僧實記

國定忠次實記

神明の強勇傳

髯黒兵衛東雄糸筋

惣角江戸紫三人兄弟

松前屋五郎兵衛

全壹冊 背皮  
金字 八美  
正價 拾六  
郵税 拾錢

小説稗史の内、最も人をして感奮興起せしめ、俗を矯め風を篤くするの益あるものは、義俠者流の談に過ぐるなし。本編はあらゆる俠客傳中より最も興味深かるものを選出して蒐集したれば、春の夜の草伽草として、此上なき好品なるべし。

71  
334

東京  
博文館  
發刊

